

附属学校国際教育推進委員会報告書（第 17 集）

～ 2025 年度 ～

附属学校群の国際教育の推進



2026 年 4 月

筑波大学附属学校教育局
附属学校国際教育推進委員会

目 次

1. はじめに	
筑波大学附属学校群における国際教育実践研究	
副学長・附属学校教育局長 呑海 沙織	3
2. 共通コンセプトに基づく附属学校の国際教育の取り組み等	4
3. 各附属学校の国際教育活動	
(1) 先進的な指導技術の交流と児童の主体的な国際交流	
(附属小学校)	7
(2) 附属中学校の国際教育	
(附属中学校)	11
(3) 2025年度の国際交流の報告	
(附属高等学校)	18
(4) 「筑駒らしさ」と国際教育	
(附属駒場中・高等学校)	23
(5) WWL 事業2年目の取り組み～総合学科の学びを活かした国際教育～	
(附属坂戸高等学校)	30
(6) 見えない壁を越えて！ "つながる世界、広がる学び"	
(附属視覚特別支援学校)	35
(7) 挑戦の先にひろがる世界	
(附属聴覚特別支援学校)	42
(8) 附属大塚特別支援学校における国際教育の取り組み	
(附属大塚特別支援学校)	46
(9) 6年ぶりの台湾・国立和美実験学校 訪問	
(附属桐が丘特別支援学校)	48
(10) 附属久里浜特別支援学校の国際交流	
(附属久里浜特別支援学校)	54
4. 各附属学校のイングリッシュルーム活動	
(1) 附属小学校 イングリッシュルームの活用報告	
(附属小学校)	60

(2) 附属中学校 イングリッシュルームの活用報告 (附属中学校)	61
(3) 附属高等学校のイングリッシュルーム活動について (附属高等学校)	62
(4) English Room 実践報告 (附属駒場中・高等学校)	63
(5) 生徒主体で広がる国際交流と英語活動の実践報告 (附属坂戸高等学校)	64
(6) イングリッシュルームでの経験を実践へ (附属視覚特別支援学校)	65
(7) 英語、国際手話に触れて、世界が身近に！ (附属聴覚特別支援学校)	66
(8) 附属大塚特別支援学校のイングリッシュルーム活動 (附属大塚特別支援学校)	69
(9) 新たな参加者の獲得を目指したいイングリッシュルーム (附属桐が丘特別支援学校)	71
5. おわりに	
2025年度の本学附属学校の国際教育を振り返って	
附属学校国際教育推進委員会委員長 篠塚 明彦	72
6. 資料編	
(1) 附属学校の国際交流協定締結状況	73
(2) 締結・更新の記録	75
(3) 報告書発行の記録	77
(4) 委員会名簿	78

5. はじめに

筑波大学附属学校群における国際教育実践研究

副学長・附属学校教育局教育長 呑海 沙織

2025年度、各附属学校では、新型コロナ流行時に始めたオンライン交流の手法も継続的に取り入れながら、対面とデジタルを柔軟に組み合わせた多様なプログラムを展開し、各校の特色を生かした国際交流を進展させました。また、教員研修や留学生受け入れも安定的に実施し、長年培ってきた国際教育の基盤を改めて強化した一年となりました。本報告書第17集は、こうした一年間の実践研究の成果を広く共有し、今後の国際教育の発展に寄与することを目的として刊行するものです。

附属学校教育局では、2024年度までの3年間の指定を受けたWWLコンソーシアム構築支援事業（以下WWL事業）「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」で、「持続可能な国際社会を創る人材育成のためのオンライン先取り履修システムの構築」に向けて「大学の学びの先取り履修システム」を構築しました。2025年度は、この事業の被提供校8校の高校生向けに「筑波大学高大接続科目等履修生制度」の運用を開始しました。一方、附属坂戸高等学校においては、2024年度からWWL事業「グローバル人材育成強化事業」で、「アジア版エラスムス計画実現に向けた高大接続型ネットワーク構築」に取り組んでいます。「大学の学びの先取り履修システム」においては、将来的にWWL・SGH連携校や海外校・東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）スクールネットワーク校の生徒にも「大学の学びの先取り履修」を提供することを目指しており、坂戸高等学校のWWL事業と連携しながら、その準備を進めています。

このような取り組みは、筑波大学第4期中期計画（2022～2027年度）に掲げられる「附属学校群における国際教育およびグローバル人材育成の推進」という方針のもとで組織的に進められています。特に、中期計画23において示されている「研究に基づく学校教育の先端化」では、2027年度までにオンラインを含む先取り履修・単位認定システムを構築し、新たな高大接続モデルの創出を目指すことが示されています。附属学校はその先導役として、実践を通して得られた知見を広く学内外に還元し、社会における学びの多様化に貢献しています。

昨年度、筑波大学附属学校群ミッションを定めました。その柱のひとつが「グローバル」です。ミッションの下、附属学校群では、異文化理解、異文化間コミュニケーション能力の向上、探究的な学習態度の育成を重視した国際教育を展開しています。各校が独自に築いてきた国際交流プログラムとWWL事業等の成果が互いに補完し合うことで、2025年度においても質の高い国際教育と研究活動が推進されました。これらの取り組みは、附属学校全体としてのネットワークを強化するとともに、新たな国際教育モデルの形成に向けた基盤づくりにもつながっていきます。

今後も、急速に変化する社会環境や学習者の多様なニーズに対応しながら、附属学校群は世界とつながる学びの場として研究と実践の両面から国際教育の発展を牽引していきます。

2. 共通コンセプトに基づく附属学校群の国際教育の取り組み等

令和8年3月

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校	視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校	
共通コンセプト		幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にすることを養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える。										
各校の国際教育の目標 (国際教育を通じて育成する生徒像)		各校の特色を生かした国際教育の取組 小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。										
(国際教育を通じて広がる教師力)		<ul style="list-style-type: none"> ・諸外国の児童・生徒の実態、教育事情を実際に体験することで、世界に誇ることができる日本の教育の特色(長・短を含む)を再認識することができる。 ・プレゼンテーション能力を向上させることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現地の授業・生活を直接体験することで、教師に求められる指導力や指導の方法が国によって異なったり、国を越えて共通していたりすることを理解する。また教師自身が他国との交流を通じて国際社会の現状の一端を実感する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の語学力向上を図るとともに、他国の文化を尊重できる国際的な感覚を身に付ける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の語学力を高めるのみならず、海外との交流を通じて異文化理解を深める。 ・姉妹校の教員と教育方針等について協議し、その類似点・相違点から本校の特色を捉えなおす機会になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科の枠を超えた協働により、教師それぞれが持つ知見を活かしながら、地球的課題を意識した教育を行う力を身に付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外国文化の研鑽を深める。 ・グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。 ・視覚障害教育における多様な指導方法等を知り、教育活動に活かす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師自身の視野を広め、語学力の向上を図る。そして聴覚障害教育の国際教育拠点の学校として、海外に発信できる力を身に付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身に付ける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際教育を推進する過程を通して、他国教師らとの間に信頼関係を築き、人的ネットワークを広げる。 ・国際感覚・国際コミュニケーション能力を身につける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外における知的障害を伴う自閉症教育に関する知見を深める。 ・自閉症教育の国際教育拠点として、研究成果を海外に発信する能力を身に付ける。 	
(国際貢献)		<ul style="list-style-type: none"> ・国内へ発信している教育成果を海外教育技術支援に活用。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国内各地へ発信している教育技術や、教師教育の成果を海外の先生方とも共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国内へ発信している教育成果を、海外へも発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外、とりわけアジア諸国の学校の生徒と研究発表を行うことができる。同時に文化的な交流をし、お互いの理解に貢献する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アジア各国の高等学校との協働を通して、世界の持続可能な社会の構築に貢献する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アジア諸国の視覚障害教育発展に寄与。 ・アジア諸国の視覚障害者職業自立推進に寄与。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚障害教育における指導法や教材教具の有効活用を具体的に国外の教育現場に提供する。特にフランスやアジア諸国に発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・知的障害児教育に関する指導法や教材教具の紹介。 ・海外からの研修生の受け入れおよび授業研究の協力。 	<ul style="list-style-type: none"> ・我が国の肢体不自由教育が培ってきた知見・指導法等を他国の教育関係機関に向けて発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自閉症教育に関わる海外の特別支援教育関係者への成果発信。 	
取組 (令和7年度)	幼児 児童 生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・香港・聖公會呂明才紀念小學の小学生約30名が来校し、交流授業を実施(4月) ・中国・蘇州外国語学校の小中学生が約30名来校し交流授業を実施(7月) ・筑波大学大学院教員研修留学生との国際交流会を実施(10月) ・TESOL 学生10名が来校し、交流授業を複数回実施(7月・12月・1月) ・日本語を学習している専門学校生約65名とのやさしい英語とやさしい日本語の国際交流会を実施(2月) ・4年生の希望者30名を対象に、オーストラリア語学研修を実施。(3月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・アメリカ短期留学(ペンシルベニア州ランカスターメノナイトスクール)に36名が参加(3月20～29日) ・国際交流プログラムを例年通り企画(3月23～25日)したが、応募者数が最少催行人数に達せず実施しなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハナアカデミックシンポジウム・高校生国際シンポジウム(韓国)に生徒3名が現地参加(7月21日～25日) ・プリンスエドワード島大学(カナダ)へ英語研修に生徒13名が現地参加(8月9日～24日) ・国立台湾師範大学附属高級中学の学校訪問(生徒32名来校)(10月31日) ・シンガポール出身の昭和女子大学教授による校内でのシンガポール学習会に25名が参加(11月7日) ・シンガポール・ホワチオン校とのオンライン交流会(11月19日)、現地訪問(シンガポール)(3月21日～26日)に生徒8名が参加 ・全国高校生フォーラムで、生徒3名がポスター発表を行う(国立オリンピック記念青少年センター)(12月21日) ・フランス高校生受け入れ、16名が来校し、午後、授業参加及び交流会を実施(2月25日) 	<ul style="list-style-type: none"> ・スイス Wettingen 高校と研究交流を実施。2025年10月2日～10月9日にスイスから生徒29名と教員3名を受け入れ、本校高校2年生30名が参加。2026年3月10日～3月16日に高2生徒30名と教員4名がスイスを訪問予定。 ・2025年12月15日～12月20日に高校1,2年生20名が台湾を訪問。台中一中、台中女子中、台湾大学を訪問。現地生徒と研究発表を通して交流。 ・2026年1月30日に釜山国際高校の生徒20名が来校。高校2年生と交流を深める。 ・2026年3月24日～3月28日に釜山を訪問予定。高校1,2年生10名、教員3名が釜山国際高校、Korea Science Academy の生徒と交流予定。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第15回SciUSサイエンスフォーラム@タイへの生徒派遣(2025年4月25日～27日、生徒2名参加) ・高大接続先取り履修科目「国際農業研修Ⅶ」@インドネシア(2025年7月27日～8月8日:筑坂生4名、愛媛大附属生5名参加) ・第1回インドネシア日本ユースSDGsセミナー@ボゴール農科大学開催(2025年8月5日、6日:日本2校、インドネシア10校参加) ・夏季オーストラリア研修(2025年8月18日～8月24日:生徒13名参加) ・WWL研修(マレーシア)(2025年9月24日～10月1日、生徒13名参加) ・WWL研修(タイ)(2025年9月28日～10月4日、生徒9名参加) ・第14回高校生国際ESDシンポジウム ・The 7th SDGs Global Engagement Conference(2025年11月15日:海外校8校、愛媛大学附 	<ul style="list-style-type: none"> ・本校に在籍する鍼灸手療法科留学生と児童の交流会(小学部) ・トビタテ!留学JAPANのプログラムでタイ視覚障害者支援慈善財団の盲学校及びインクルーシブ教育校にて留学、交流とホームステイなど 高等部生徒2名 ・インド共和国オディシャ州政府の要望に応え、本校、筑波技術大学、日本点字図書館等、日本の視覚障害者教育関連施設見学を企画、引率(通訳) ・本校に在籍する鍼灸手療法科生徒と、本校が国際交流協定を結ぶインド共和国全国盲人協会グジャラート支部、職業教育課程、日本式医療手療法 J.M.M.T.:Japanese Medical Manual Therapy 学科の生徒との英語を使つてのオンライン交流会を実施。 ・昨年度より国際交流協定を結んでいる全国盲人協会グジャラート 	<ul style="list-style-type: none"> ・フランス国立パリ聾学校生徒訪問交流(5月20日・26日)、オンライン交流(12月12・19日) ・臺北市立啓聰學校生徒訪問による対面交流11月7日(金)、訪台による対面交流(12月9日～12日) ・韓国国立ソウル聾学校オンライン交流(5月28日) ・筑波技術大学の講師による国際手話の授業(6回) 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園、小学部、中学部、高等部におけるALTによる英語の授業の実施。 ・小学部:台湾訪問報告会 ・高等部:台湾和美実験学校とのオンライン授業の実施。和美実験学校での生徒代表の直接交流。台湾訪問報告会。筑波大学大学院教員研修留学生との交流 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学部:JICA地球ひろば訪問 ・小学部:台湾訪問報告会 ・高等部:台湾和美実験学校とのオンライン授業の実施。和美実験学校での生徒代表の直接交流。台湾訪問報告会。筑波大学大学院教員研修留学生との交流 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学5年生児童と中国達敏学校小学部4年生児童との「自分の好きなもの」をテーマとしたオンライン交流授業の実施。 	

				<ul style="list-style-type: none"> Stanford e-Japan 2026 春学期 (オンライン) に生徒 1 名が選ばれ参加 (2026 年 1 月～2026 年 5 月) 		<ul style="list-style-type: none"> 属高校参加) <ul style="list-style-type: none"> イオン 1% クラブティーンエイジアンバサダープログラム (マレーシア) (2026 年 1 月 19 日～25 日、生徒 10 名参加) オーストラリア春季研修@西オーストラリア (2026 年 3 月 21 日～30 日、生徒 19 名・引率 2 名参加) 	<ul style="list-style-type: none"> 支部 (インド) を訪問し、現地教員及び卒業生に対して手技療法治療のレベルアップ講義及び実技指導を行うとともに、全盲生徒も可能な化学実験の実演紹介を実施。 インド共和国オディシャ州政府の要望に応え、オディシャ州を訪問し、全盲生徒も可能な化学実験の実演紹介を実施。 本校鍼灸手技療法科卒業生 (モンゴルからの留学生) が代表を務めるモンゴル視覚障害児教育支援オユンラグセンターの要請を受け、本校、筑波技術大学、日本点字図書館等、日本の視覚障害者教育関連施設見学を企画し、実施。 				
取組 (令和 7 年度)	教師国際貢献	<ul style="list-style-type: none"> マレーシアより授業参観・意見交換会 インドネシアより授業参観・意見交換会 セネガル共和国より授業参観・意見交換会 デンマークより授業参観・意見交換会 イギリスより授業参観・意見交換会 韓国より授業参観・意見交換会 算数教員による北欧・英国算数授業研究会を現地で実施 (デンマーク、リンビートーベック市との提携による授業研究会、英国エクセター大学での授業、および授業研究会・日本のカリキュラムについての講義) 算数教員によるインドネシア算数授業研究会を現地で実施 (ジャカルタ・ジョグジャカルタ・バンドン・テルナテ・パプアにおいて算数授業研究会の開催) 	<ul style="list-style-type: none"> シンガポールから大学教員視察団体受け入れ 授業参観 (11 月 21 日) 	<ul style="list-style-type: none"> 国立台湾師範大学附属高級中学の教員との交流 (教員 4 名来校) (10 月 31 日) 韓国ハナ高校職員の図書館視察受け入れ (5 名来校) (筑波大学東京キャンパス図書館視察も含む) (1 月 19 日) 	<ul style="list-style-type: none"> 2025 年 10 月にスイス Wettingen 高校教員と教育方針について協議。2026 年 3 月の訪瑞時には本校教員が理数教育について発表予定。 2025 年 12 月 19 日の訪台時に台中一中の教員 5 名と教育方針等について協議。 2026 年 1 月 30 日釜山国際高校来校時に教員 3 名と教育方針等について協議。 	<ul style="list-style-type: none"> タイ・カセサート大学附属高等学校より理科教員 2 名の研修受け入れ (12 月 7 日～19 日) 第 5 回 SEA-teacher パイロット事業受け入れ (2025 年 2 月 9 日～2 月 27 日: インドネシア教育大学、コンケン大学、セントラルルソン大学 教育実習生各 2 名、計 6 名、受け入れ教科: 英語、地歴公民) 	<ul style="list-style-type: none"> 協定締結先と、教科指導に関する情報交換、指導法教授。 アジア諸国の視覚障害者職業自立推進に寄与。 	<ul style="list-style-type: none"> 150 周年記念式典・祝賀会招待 (バリ聾学校校長、ソウル聾学校校長、小学部主幹) 韓国昌原大学より乳幼児教育相談視察 国際手話の研修 国際協力機構 (JICA) 「インクルーシブ教育実践強化 2025」中南米特別支援教育関係者視察受入れ 	<ul style="list-style-type: none"> JICA (筑波大学、お茶の水大学) の受け入れ。 スポーツ庁事業、ASEAN 各国政府関係者の視察の受け入れ。 直接訪問による日本人学校 (韓国・ソウル) へのコンサルテーション。 	<ul style="list-style-type: none"> 中南米 7 か国 (ベリーズ、ドミニカ共和国、メキシコ、ニカラグア、パラグアイ、ペルー、ウルグアイ) の JICA 「インクルーシブ教育実践強化 (すべての子どもを支える授業づくり) 特別支援教育機関関係者視察、意見交換 	<ul style="list-style-type: none"> モンゴル国立障害児リハビリテーション開発センター所長他 11 名の視察受け入れ。 カザフスタンのカラガンダ州教育局 27 名の視察受け入れ。 北京師範大学教授 2 名視察受け入れ。 キューバ日本人連絡会 6 名の視察受け入れ 中南米 7 か国の JICA 研修員 10 名の視察・研修受け入れ。 海外子女教育振興財団による上海日本人学校虹橋校に対するオンライン研修会の実施。 海外子女教育振興財団による上海日本人学校虹橋校に対する訪問コンサルテーションの実施。 中国達敏学校教職員・保護者などを対象とした研修会の実施。
環境整備	現状	<ul style="list-style-type: none"> ALT と自由にコミュニケーションが図れるイングリッシュルーム (Tsukuba English Café) の開設 ウェブ会議システム等の活用 海外絵本コーナーの設置 	<ul style="list-style-type: none"> 英語が話せる者が常駐し、生徒が自由に活用できるイングリッシュルームの設置 (前期週 1 日、後期週 2 日)。 	<ul style="list-style-type: none"> ウェブ会議のシステム。 	<ul style="list-style-type: none"> English Room 講師による発表プレゼンの指導 English Room 事業による英語ディスカッションの指導 海外大学関係者による出願指導 	<ul style="list-style-type: none"> 海外の大学附属学校や海外大学と連携した、国際会議、探究学習を実施している。今後、単位認定や継続的な国際会議を検討するが、いかに予算を確保するかが課題である。 海外研修体験を校内で還元する仕組みを構築し、費用負担が難しい生徒にも、国際教育をより身近にする必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ウェブ会議システム 	<ul style="list-style-type: none"> 音声文字変換アプリの充実 	<ul style="list-style-type: none"> ウェブ会議システム。 教材・教具の展示。 	<ul style="list-style-type: none"> ウェブ会議システム 	<ul style="list-style-type: none"> ウェブ会議システム等の活用。 図書室の海外絵本コーナーの設置。 海外研修視察プログラムの充実。 児童間のオンライン交流における事例の蓄積。

<p>将来構想</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・体験的活動の充実 ・海外の学校との交流 ・ICTを活用した国際交流会の充実 ・児童間のオンライン交流授業の教育課程上の位置付け継続して実施する ・ALTの常勤化 ・教員の海外研修の充実 ・継続的な財政的基盤を得て、渡航費・通訳費の確保 	<ul style="list-style-type: none"> ・ALTの常勤化 ・教員の海外研修の充実 ・留学生や使節団の受け入れ体制の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習生・留学生等の受け入れのための宿泊施設。 ・本校生徒の海外留学、海外からの留学生受け入れのための奨学金制度。 	<ul style="list-style-type: none"> ・SSH以外に財政的支援を求め、海外交流をさらに活性化する。 ・英米の学校との交流開始 ・ホームステイプログラムの実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・SEA-teacherプログラムや、アセアン各国の国際連携協定校との連携を拡大強化し、アジア版エラスムスのプロトタイプ版を提言、実現する。 ・国を越えた教職員人事交流事業の実現に向けた構想の提言を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際交流協定校への短期留学の継続及び生徒の受入 ・本校生徒の長期留学に向けた制度、基盤を作る。留学に係る奨学金等費用の確保。 ・留学生支援の充実。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外への教員派遣 ・学外に公開できる「国際コミュニケーションルーム」の開設 ・本校生徒の長期留学に向けた制度、基盤を作る。留学に係る奨学金等費用の確保 ・留学生支援の充実。 ・聴覚障害教育における海外のインクルーシブ教育の現状と課題に関する情報交換 ・アジア太平洋地域聴覚障害問題会議（APCD）及び第21回ろう教育国際会議等での発信 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議システム等を利用した日本人学校（韓国・ソウル）へのコンサルテーション。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議システムを活用した授業交流や情報交換とともに、対面での異文化交流を一層充実させる。 ・以前の海外提携校や新たな海外校との交流を開拓する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議システム等を利用し、姉妹校教師間で授業検討会を実施し、自閉症教育の発展に寄与する。 ・ウェブ会議システム等を活用し、幼児児童間のより充実した交流方法を検討する。 ・児童間のオンライン交流授業の教育課程上の位置付けを明確化し、継続した実施を目指す。
-------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

3. 各附属学校の国際教育活動

附属小学校

先進的な指導技術の交流と児童の主体的な国際交流

1. 本校の国際教育の特徴

本校では、先進的な教育技術の交流及び児童の主体的な国際交流の推進を目的として、国際教育活動に取り組んでいる。国内の教育研究校としての使命と責任のもと、授業研究を核とした国際的な教育交流を通して、教育の質の向上とグローバル人材の育成を目指している。

日常的に授業研究を重ねる文化を基盤に、海外教育機関との教育技術交流を継続して実施している。授業を公開し、協議を通して改善を図る日本の授業研究の在り方は、海外の教育関係者からも高い関心と評価を受けている。実際に、海外教員との協議会においては、「日本の教師は、授業をさらに磨き上げようとする姿勢を持っている」との評価が寄せられ、授業後の協議では、「教師の役割は、子どもに考える機会を与えることである」という言葉を通して、日本の授業研究の本質が共有されている。

諸外国においても授業改善への意欲は共通しているものの、日本のように授業を基にした協議を継続的に行う機会は限られている。そのため、デンマークやイギリスでは、日本の授業研究を「Lesson Study」として研究対象とし、大学教員を交えながら自国の教育に取り入れようとする動きが続いている。こうした点に、本校の国際教育活動がもつ意義と独自性があるといえる。

2. 活動内容

(1) 海外校との授業交流

本年度は、毎年継続して行っているデンマーク（コペンハーゲン）での授業交流と昨年度から新たに加わったイギリスのエクセター大学（デボン）において、算数科の授業研究および講義を実施した。また、筑波大学の磯田特任教授に同行し、8月17日～8月31日まで算数・理科の授業研究会をインドネシア6都市で行った。算数は、田中・中田・森本が1年生の「いくつといくつ」3年生「量分数」の授業を、理科は、鷲見がプログラミングの授業を実施した。



(2)児童の国際交流活動

本校では、児童が実際の人との関わりを通して異文化を理解し、多様な他者と主体的に関係を築こうとする態度を育成することを目的に、年間を通して多様な国際交流活動を計画的に実施している。これらの活動は、外国語によるコミュニケーション能力の育成にとどまらず、人と人とのつながりを大切にし、相手を理解しようとする姿勢を育むことを重視して行っている。

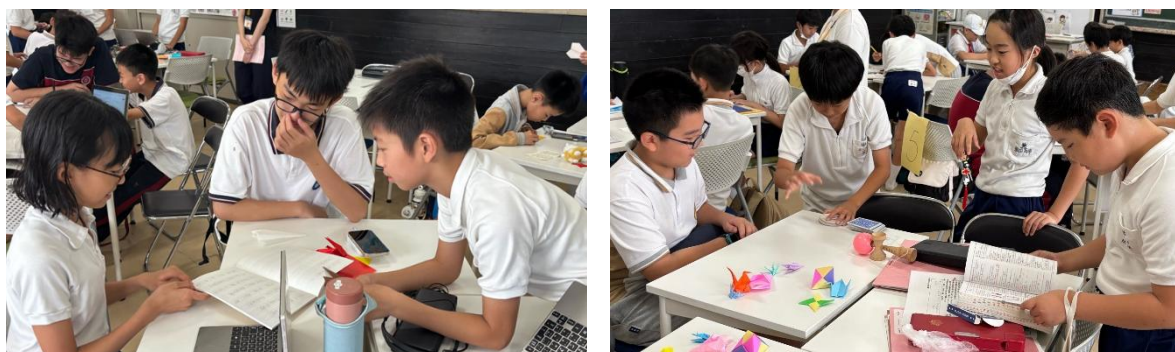
4月には、香港・聖公會呂明才紀念小學の小学生約30名が来校し、交流授業を実施した。初めて出会う海外の同年代の児童を前に、緊張した様子も見られたが、簡単な英語表現や身振り、表情を工夫しながら積極的に関わろうとする姿が次第に増えていった。言語が十分に通じなくとも、伝えようとする気持ちが相手に届くことを体感する貴重な機会となった。



5月には他大学のTESOLを専攻する留学生約10名が来校し、交流授業を年間複数回実施した。英語教育を専門とする学生との交流は、児童にとって英語を「学ぶ対象」から「使う手段」へと捉え直す契機となった。TESOL学生との交流は7月にオンライン、12月、1月に対面で継続して実施され、回を重ねるごとに児童が自信をもってやり取りする姿が見られるようになった。



7月には、中国・蘇州外国語学校の小中学生約30名が来校し、交流授業を行った。年齢や学習段階の異なる相手との交流を通して、児童は相手の様子を見ながら話す内容や伝え方を工夫する姿を見せ、コミュニケーションに対する意識の広がりが見られた。



10月には、筑波大学大学院教員研修留学生との国際交流会を実施した。多様な国や文化的背景をもつ留学生との交流を通して、児童は世界にはさまざまな考え方や生活の仕方があることを実感するとともに、相手を理解しようとする態度を深めた。質問をしたり、自分の考えを伝えようとしたりする姿勢から、主体的に学ぼうとする姿勢の育ちを実感した。



2月には、日本語を学習している専門学校生約 65 名との国際交流会を実施した。「やさしい英語」と「やさしい日本語」を用いたコミュニケーション活動を通して、児童は相手の立場に立って言葉を選ぶことの大切さを学んだ。言語の難易度を調整しながら伝え合う経験は、相互理解の基盤となる思いやりの態度を育む機会となった。



さらに、本年度末には、4年生の希望者 30 名を対象としたオーストラリアでの語学研修を実施する予定である。現在 ALT と Tsukuba English Cafe において渡航準備研修を重ねている。現地での生活体験や学習活動を通して、児童が異文化の中で実際に言葉を用いて関わる経験を積むことで、国際的な視野を広げ、自ら進んで学び、行動しようとする態度のさらなる伸長を期待している。

これらの国際交流活動を通して、児童は言語の習得だけでなく、人とのつながりを大切にし、異なる文化や考えを尊重しながら主体的に関わろうとする力を着実に育んできた。本校の国際教育活動は、今後も児童一人一人の成長を支える重要な学びの機会として位置付け、継続的に充実を図っていく。

3. 成果と考察

海外では、授業がパッケージ化され、教師がその通りに授業を実施する事例も多く見られる。効率性という利点はあるものの、目の前の子どもを最もよく理解している教師が、子どもに合わせて授業を構想することの価値は大きい。

本校が重ねてきた授業研究は、形式的な完成度よりも、子ども一人一人の学びに向き合い、考え続ける教師の姿勢を大切にしてきた。その積み重ねこそが、国内外から高く評価されている理由であり、今後の教育の在り方に重要な示唆を与えるものであると考える。

4. 今後に向けて

今後も、本校が長年培ってきた授業研究の文化を基盤に、国際的な教育交流を継続・発展させていく。その中で、児童が主体的に考え、他者と協働しながら学ぶ力を育成するとともに、日本の教育実践の価値を国際社会に発信していきたい。

附属中学校の国際教育

1. 本校の国際教育の特徴

本校における国際教育は、グローバル化した多種多様な社会において、地球的視野に立ち、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するために、自己を確立し、他者を受容し共生しながら、発信し行動できる力を育成することを目標としている。

例年行っている活動としては、ALT と個別に会話を楽しむことのできるイングリッシュルームの開室や、年度末に希望者に向けて実施しているアメリカ短期留学プログラムである。それらに加えて、今年度は、英語圏以外の世界の国々へも興味・関心を持つことができるように、国際交流プログラムも企画した。

2. 国際教育活動報告

*** 主なプログラムは年度末に実施しているため、(1) (2)については令和6年度実施分のみを報告する**

(1) アメリカ短期留学プログラム

令和7年の春休み期間にアメリカ・ペンシルベニア州にある Lancaster Mennonite High School への短期留学を実施した。毎回多くの希望者がいる中、選抜された2・3年生計36名（2年17名、3年19名）が参加した。実施内容は以下の通りである。

①目的：

- i 現地の学校生活を経験するとともに、アンバサダー(学校で付き添ってくれる在校生)やホストファミリーとのふれあいによる異文化理解・異文化交流を通して、視野を広げる。
- ii 英語を実際に使う体験を通して、外国語学習や学校生活全般への意欲を高める。
- iii 海外での経験を他の生徒に伝え、他の生徒の海外への関心や外国語学習への意欲を高められるように働きかけを行う。

②日程：2025年3月22日（土）～ 3月31日（月） 10日間

③内容：

【事前研修】

12/14 土 3-1HR	・アイスブレイキング ・コミュニケーション活動（自己紹介） ・グループ・リーダー決め等 ・アメリカ建国の歴史について（山形先生より）
1/25 土 3-1HR	・コミュニケーション活動（より詳しく自己紹介）→（お土産を選んで説明） ・フェアウェルパーティ&日本文化紹介の確認、相談 ・ISA より（留学の心構え、トラブル事例）
2/15 土 1-2HR	・コミュニケーション活動（お土産を選んで説明）→（日本の行事を紹介） ・フェアウェルパーティ&日本文化紹介の確認、相談 ・キリスト教について（渡辺 Y 先生より）
2/27 木 3-1HR	・コミュニケーション活動（日本の行事を紹介） ・日本文化交流の詳細話し合い・フェアウェルでの出し物練習 ・Barnes Foundation について（調べた内容の共有） ・ホームステイペアの発表

3/1 土 桐陰会館	<ul style="list-style-type: none"> ・（昼食時）前回参加者との質疑応答 ・参加者及び保護者に対する最終オリエンテーション、ホストファミリー発表 ・集合場所、持ち物、服装などの注意、事後研修と課題について ・日本文化交流の詳細話し合い・フェアウェルでの出し物練習
---------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【研修内容】

3/22 土	<p>（日本時間）8:00 集合 11:05 羽田出発（予定） 出発遅れ（約7分） （現地時間）10:53 予定より7分ほど早く JFK に到着 バスでペンシルベニア(PA)へ 16:45 Lancaster Mennonite High School で下車→迎えに来たホストファミリーと各家庭へ</p>
3/23 日	ホストファミリーと過ごす
3/24 月	<p>08:15 Room 118 集合→簡単にオリエンテーション→校内ツアー→バディ生徒とマッチング 2 限より各バディと授業へ（2 限開始 09:04） 3 限チャペルでの集会で、High School 生徒全員への紹介 4 限からまた授業へ 15:05 に Room 118 で再集合し、翌日以降の確認→迎えに来たホストファミリーと帰宅</p>
3/25 火	<p>08:15 Room 118 集合→各バディと授業へ（1 限開始 08:15 8 限終了 1505） 15:05 に Room 118 で再集合し、一日のまとめと翌日の確認→迎えに来たホストファミリーと帰宅</p>
3/26 水	<p>08:15 Room 118 集合→各バディと授業へ（1 限開始 08:15） 3 限チャペルでの集会で、代表 2 名の挨拶後、全員で桐陰会会歌斉唱（1 番のみ） 4 限からまた授業へ 昼食後、体育館で準備→14:00-15:00 日本文化交流：折り紙、書道、いろいろな遊び 15:05 に Room 118 で再集合し、一日のまとめと翌日の確認→迎えに来たホストファミリーと帰宅</p>
3/27 木	<p>08:15 Room 118 集合→各バディと授業へ（1 限開始 08:15） 10:45-10:55 避難訓練で校舎の外へ一時避難 13:30-14:30 引率 3 名（教員+ISA 添乗員）と AHLI スタッフ 2 名で打ち合わせ 15:05 に Room 118 で再集合し、一日のまとめと翌日の確認→迎えに来たホストファミリーと帰宅</p>
3/28 金	<p>08:15 Room 118 集合→各バディと授業へ（1 限開始 08:15） 14:30-15:30 フェアウェルプログラムでの出し物のリハーサルと設備確認@カフェテリア 15:30-16:00 修了式@カフェテリア（修了証授与）※集合写真撮影 16:30-19:00 フェアウェルプログラム&ピザパーティ →ホストファミリーと帰宅</p>
3/29 土	<p>フィラデルフィア観光 06:15 LMHS 集合 06::45 出発→Liberty Bell Center & Independence Hall Barnes Foundation（美術館）→Reading Terminal Market で昼食・買い物 →Times Square 付近のレストランで夕食→JFK 空港</p>
3/30 日	（前日よりそのまま）01:30 JFK 出発（予定） 遅れなし
3/31 月	<p>05:12 羽田到着 定刻より約 30 分遅れ 06:30 過ぎ 荷物受け取り確認後解散</p>

【事後研修】

4/2 水	<p>於 2-5HR（英語科・English Room に近く便利） 提出物回収 ①レポート（A4 用紙 2 枚） ②写真 10 枚（①②のデータは USB メモリで</p>
-------	----------------------------------------------------------------------------------------------

10:00-	提出) ③報告ポスター (出来上がっている生徒のみ)
12:00	物品回収 文化紹介に使った学校保管の物品 (折り紙、けん玉、ベイブレードセットなど) 学んだことや自分の中の変化を口頭発表→6 班に分かれ、今後この行事に活かせることを話し合う (新3年生のみ) 4月のHRHと9月の学発で発表する内容・分担の打ち合わせ

④まとめ

- 10 日間を通して、大きく体調を崩す生徒もおらず、全てのプログラムに全員で参加することができた。
- これまでも受け入れ校の変更は何度か経験しており、今回も初めて訪問する学校であったが、国際交流専門のスタッフがおり、寛大かつ柔軟に受け入れていただいた。各生徒に1人のアンバサダーをつけてもらえるのは例年のことだが、参加生徒よりも少し年上の10～11年生が割り当てられ、親切に付き添ってくれた。生徒たちも多くの友人を作れたことには満足感や自信を持てたようだった。事前にアンバサダーの情報がほしいという声もあったが、現実的には難しいため、初対面の際にコミュニケーションをとる時間を確保するなどしたい。
- 文化交流の時間やフェアウェルパーティの出し物は、それぞれに準備・工夫をし、ホストファミリーに楽しんでもらえるものとなった。居残りできるアンバサダーが少ないことを生徒たちは残念がっていた。開催する時間帯や形式は検討の余地がある。
- ホストファミリー宅では、それぞれの家庭でさまざまな体験をさせていただいた様子で、良い経験となった。生徒側からもホストファミリー側からも大きな不満はなく、円滑にホームステイが行われた。
- American Home Life International のホームステイコーディネーターである Zimmerman 氏、LMHS の先生方、GPI US の岩木氏、その他見学先のスタッフの方々など、多くの方々から「行儀が良い」「英語コミュニケーション力が高い」「集中して授業に取り組み、良い質問をする」とお褒めの言葉をいただいた。



(2) 国際交流プログラム

令和7年の春休み期間に TGG（東京 GLOBAL GATEWAY）と桐蔭会館を使って、国際交流プログラムを行った。1，2年生の39名が参加した。

①目的：

諸外国から日本国内に留学している学生たちとの交流や体験型英語学習施設での研修を通し、大きな刺激を受け、英語力やプレゼンテーション能力の向上だけでなく、グローバル社会において広い視野を持てるようにする。

②日程：2025年3月24日（月）～ 3月26日（水）3日間

③内容：

3月24日（月）@TOKYO GLOBAL GATEWAY(TGG)

参加者：生徒39名 教員(引率)2名 ISA(引率)1名

5グループ（7人～8人）に分かれ、エージェントと呼ばれる外国人と一緒に、アクティブイマージョンエリア、アトラクションエリアで活動を行った。

【チームビルディング】9:00-9:30

自己紹介から始まり、アイスブレイキング的な活動を行った。最初は英語で話すことにためらいや恥じらいを感じているような雰囲気の生徒もいたが、徐々に緊張がほぐれていく様子が見てとれた。

【アクティブイマージョンエリア】9:40-10:40

Mars Experience「火星での生活を考えよう」

火星に関するクイズや動画を通して、火星での暮らしがどのようなものになるかを学び、想像を巡らせ、グループで話し合いを行った。

【アクティブイマージョンエリア】10:50-11:45

Public Speaking「スピーチのテクニックを身につけよう」

聞き手にしっかりと伝わるような効果的なプレゼン方法を学び、パブリックスピーチスキルの基礎の習得を目指した活動を行った。

【ランチタイム&ランチプログラム】12:00-12:50

ランチタイムには、昼食をとるだけでなく、世界の国紹介のビデオ放映があった。グループで協力し映像で出されるクイズに楽しそうに取り組んでいた。

【アクティブイマージョンエリア】13:00-14:00

Performing Arts「演劇をしよう」

ボークルトレーニングやマイム、寸劇を体験し、演劇ならではの発声方法や表現力を身につけるといふねらいのもと、さまざまな表現方法を学び、体験した。

【アトラクションエリア】14:10-15:10

・トラベルゾーン／ホテルゾーン

エアポート、スーベニアショップで、空港でのお土産購入や飛行機の機内でのやりとり、またファーマシー、レストランでの食品や雑貨の購入、ホテルでのチェックイン、クリニックでの診察など、

外国に渡航した後という設定でのリアルなコミュニケーションに挑戦した。

【リフレクション】 15:15-15:55

振り返りも英語で行い，英語漬けの1日を過ごした。



3月25日（火）@桐陰会館

参加者：生徒 39名 教員 1名 ISA 1名 ファシリテーター1名（フィリピン）

留学生7名（マレーシア・フィリピン・タンザニア・ナイジェリア・パキスタン・アフガニスタン・スリランカ）

【アイスブレイカーアクティビティ】 9:35-10:35

7グループに分かれ，お互いの自己紹介を行ったあと，チーム名や2日間で達成したい目標などを設定した。それぞれのグループのリーダー（留学生）からアドバイスを受けながら話し合い，発表まで行った。

【異文化理解】 10:35-11:50 12:40-13:30

異文化理解の時間では，ファシリテーターや留学生の出身国について深く知るという目的で，留学生からのプレゼンテーションを聞いた。グループ内で行ったため，それぞれ個別に質問もできていた。その後，それぞれの国の似ているところと違うところを出し合い，ディスカッションを行った。

【英語スピーチの仕方】 13:40-15:00

英語でスピーチを行う際のポイントや構成について学んだ後，リーダーである留学生（インドネシア・セネガル・マラウイ）のモデルスピーチを聞き，その後，トピックリストから各自が好きなトピックを選びリーダーからアドバイスを受けながらスピーチを作成。その後，グループ内で発表，フィードバックをし合い，グループの代表者が前に出てスピーチを行った。1年生も2年生も堂々と発表している姿が素晴らしかった。

3月26日（水）@桐陰会館

参加者：生徒 38名（1名欠席） 教員 2名 ISA 1名

留学生7名（マレーシア・フィリピン・タンザニア・ナイジェリア・パキスタン・アフガニスタン・スリランカ）



【Fun Project 1 COOL JAPAN-日本を世界に発信しよう】 9:00-10:50

3日目は全員で輪になってのウォームアップから始まった。午前中の最初の活動は COOL JAPAN をテーマに、外国人にとって、日本のどのようなところが魅力的に映るのか、グループリーダーから日本の良さを聞き出すことであった。その後、Q&A を通して、日本の COOL だということを各グループでプレゼンすることになり、準備を行った。このプレゼンは advertisement（宣伝、広告）であるということを前提に、Fun であり人を惹きつけるものでなければならないという条件があった。どのグループのプレゼンも個性的で、魅力的なプレゼンであった。

【Fun Project 2 文化交流フェスティバルを企画しよう】

11:00-11:50 準備 12:40-14:10 プレゼンテーション

文化交流フェスティバルでは、留学生もメンバーとして一緒に準備をし、アクティビティを楽しんだ。アクティビティの内容は以下の通りである。

- ・縁日（ヨーヨー釣り、射的）
- ・和菓子作り
- ・書道
- ・消しゴムハンコ（浮世絵）
- ・藍染
- ・金継ぎ
- ・ひな祭り



(3) 教員視察としての学校訪問

今年度は、以下の国から学校視察を受け入れた。

- ・ 9/17 中国寧波からの視察（中学校長等） 授業参観と動画視聴
- ・ 11/21 シンガポールからの視察（大学教員） 授業参観（社会・英語）と教員懇談

学校視察の際には、生徒にも案内をするため、自分たちから積極的にあいさつしたり、学級によっては黒板に訪問国の言葉であいさつが書かれていたり、訪問者に質問をして交流したりと、いつでも、どの地域の方が訪問しても歓迎する雰囲気が全校にある。

2025 年度の国際交流の報告

1. 本校の国際教育の特徴

2025 年度は、海外渡航による国際交流事業をはじめ、海外校の受入交流、国際シンポジウムへの参加、オンライン交流など、多様な形態で国際教育活動を実施することができた。生徒が実体験を通して異文化に触れ、英語による発信力や多文化理解を深める機会を数多く設けることができた。

<渡航による実施>

- (1) 第 15 回ハナアカデミックシンポジウム (韓国・HAS)
- (2) プリンセスエドワード島大学英語研修 (カナダ)

<対面方式による実施>

- (3) 国立台湾師範大学附属高級中学来校
- (4) シム・チュン・キャット先生のシンガポール特別授業
- (5) 全国高校生フォーラム
- (6) ハナ高校職員 来校
- (7) ホワチョン高校卒業生との交流会

<オンライン、及び渡航による実施>

- (8) シンガポール短期留学

2. 各国際交流事業の報告

- (1) 第 15 回ハナアカデミックシンポジウム (韓国・HAS)

本シンポジウムは、2025 年 7 月 21 日から 25 日までの期間、海外渡航による形で韓国ソウル・ハナ高校主催とし、同校を会場として実施され、本校 2 年生 3 名が参加した。本シンポジウムには、日本を含めたアジア諸国、本校を含めた 6 校、総勢 100 名以上の高校生が参加した。2025 年度は、“AI: Opportunities and Challenges”というテーマで各校が論文を作成し、事前に提出することが求められた。本番では、ホスト校に加え、多くの高校がプレゼンテーション（ステージでの発表またはポスター発表）と議論を重ねた。

2024 年 2 月に行われたメンバー選出からの約 5 か月間、シンポジウムでのプレゼンテーションに向けての検討を重ねた。渡航直前の 7 月上旬には、早大学院の先生の企画による「前哨戦」という名の事前練習会にも参加した。生徒は英語による研究発表を通して、国際的な場において自らの考えを発信するとともに、他国の生徒との意見交換を通して視野を広げる貴重な経験を得た。

期間中は文化交流も行われ、本校は昨年度に引き続き『ドラえもん音頭』を披露し、海外でもメジャーなドラえもんと、日本の文化の盆踊りの出し物は大成功であった。



(2) プリンセドワード島大学英語研修 (カナダ)

2025年8月9日から24日までの16日間、本校2年生3名、1年生11名がカナダ東海岸のプリンセドワード島にあるプリンセドワード島大学で研修をした。各生徒はホームステイをして、各家庭と一緒に料理を作ったりしながら交流をした。午前中は、筑波大学附属高校用に開設された講義と演習、午後はダウンタウン散策など様々なアクティビティが行われた。ミュージカルを観劇したり、赤毛のアンでおなじみのグリーンゲイブルズも訪問をしたりもした。作者のモンゴメリが勤めていた郵便局では日本に手紙を送り、それぞれの家族へ現地での思いを伝えた。研修最終日には、2週間現地で学習したことのまとめとしてプレゼンテーションをお行い、全ての生徒が高い評価を得ることができた。この研修で行ったプレゼンテーションは、9月の桐陰祭(文化祭)でも行った。発表会場には、本校生徒だけでなく、多くの保護者にも参加していただき、それぞれの発表後は、活発な質疑応答が英語で行われた。



(3) 国立台湾師範大学附属高級中学来校

2025年10月31日に、国立台湾師範大学附属高級中学(来校生徒32名、引率教員4名)より、日本の高校生の学校生活を知りたいという要請を受け、交流会を行った。台湾の生徒32名に対して、案内役のバディとして、33名の附属高校生が申し込んだ。昼休みに、全校集会で歓迎行事をして、そこでバディと対面をした。その後、本校教員から一日のプログラムの流れを説明し、台湾からの高校生は、附属高校生と一緒にそれぞれの5時間目、6時間目の授業に参加した。放課後には、生徒会執行部主催による歓迎会が催され、生徒同士が積極的にコミュニケーションを図り、学校生活や文化の違いについて理解を深める機会となった。



(4) シム・チュン・キャット先生のシンガポール特別授業

本特別授業は、2025年11月7日に本校において対面形式で実施され、1・2年生合わせて26名が参加した。講師としてシム・チュン・キャット先生(昭和女子大学教授)を迎え、シンガポールの教育

制度の歴史的背景について英語による講義が行われ、生徒にとって教育を多角的に捉える学びの機会となった。

シム・チュン・キャット先生（昭和女子大学教授）先生は、本校と交流のあるシンガポール・ホワチョン校のご出身である。東京大学大学院への留学後はシンガポール教育省に勤務された経歴を持ち、今回はシンガポールの建国の歴史と関連づけながら、同国の教育事情について講義していただいた。講義は、生徒同士のディスカッションを交える形式で進められ、すべて英語で実施された。

教育に関する各種データをもとに、シンガポールと日本に限らず複数の国々との相違点についても説明をいただいた。特に、シンガポール・日本・諸外国の教育制度の違いや、そのような制度が採用されている背景について具体的な解説があり、その後の質疑応答では先生と参加者が活発に意見を交わした。これらのやり取りを通して、生徒にとって有意義な学びの機会となった。

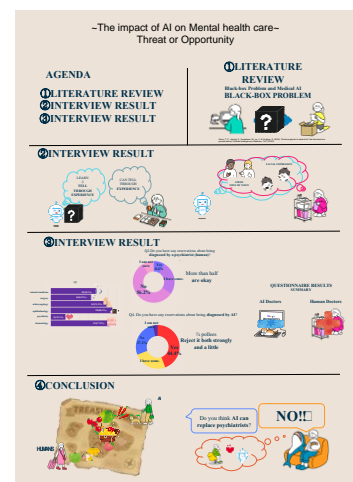
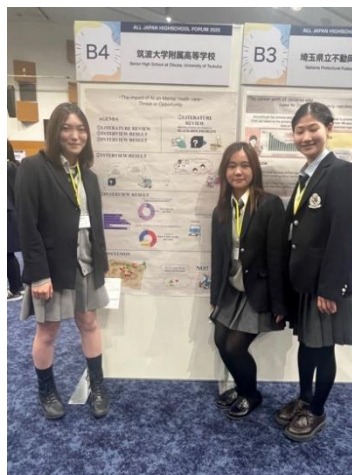


(5) 全国高校生フォーラム

2025年度全国高校生フォーラムは、2025年12月21日（日）に、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）において、対面形式で開催された。全国から集まった高校生が、グローバルな社会課題をテーマに、英語によるポスター発表および意見交換を行った。

本校は、ポスターセッション（プレゼンテーション）に対面で参加した。HASに参加した生徒が、現地での議論をもとに「The Impact of AI on Mental Health Care - Threat or Opportunity」を発表タイトルとして、3名がポスター発表を行った。発表では、AIがすでに多様な分野で活用されており、将来的には心療内科をはじめとするメンタルヘルスケアの分野においても、AIが重要な役割を担う時代が到来する可能性について考察した。

当日は、ポスターセッションに加え、小グループに分かれてのディスカッションも行われ、他校の生徒と意見を交わしながら、多角的な視点で社会課題について理解を深める機会となった。



(6) ハナ高校職員 来校

本校視察は、2026年1月19日に実施され、韓国ハナ高校の教職員5名が来校した。韓国ハナ高校には、毎年7月に本校生徒が国際シンポジウム参加のために訪問している。今回は、教育環境の視察

を目的とした来校であり、特に学校図書館の教育的役割についての調査に重点が置かれた。

当日は、本校施設の視察を行った後、本校司書を交えて、図書館が果たす教育的役割や学習支援の在り方について活発な質疑応答および意見交換が行われた。また、本校視察に加え、筑波大学東京キャンパス図書館も訪問し、同施設の職員より、高大連携における大学図書館の役割や取り組みについて説明を受けた。半日の視察ではあったが、学校図書館を軸とした教育実践について、具体的かつ実践的な意見交換が行われ、双方にとって非常に有意義な機会となった。



(7) ホワチョン高校卒業生との交流会

シンガポール・ホワチョン高校への短期研修の一環として、2026年1月17日(土)にホワチョン高校の卒業生との交流会を本校で行った。来校したホワチョン高校の卒業生は、昨年度の研修で本校生徒のバディを務めてくださった方で、同じく卒業生のご友人1名とともにいらっしやった。昨年度の研修参加者の2年生数名に加えて、今年度の研修参加者の1年生8名が参加し、1時間程度の英語での交流を楽しんだ。企画と運営は、研修後に卒業生と連絡を取り続けてきた本校2年生がすべて行い、参加者は英語でのフリートーク(自由対話)やミニゲームで盛り上がった。

短期研修終了後も本校生徒がバディとのつながりを大切にしていることは喜ばしい。また、今回の交流会は、これから研修に参加する1年生にとっても励みとなる良い機会になったと考えている。今後もこのような取り組みをぜひ続けていきたい。



(8) シンガポール・ホワチョン高校への短期研修

今年度は、2026年3月21日(土)～26日(木)の日程でシンガポール・ホワチョン高校(Hwa Chong Institution)への短期研修が実施される。本校からは1年生8名が参加し、ホワチョン高校の生徒16名、関西大学高等部の生徒6名と交流する予定である。

その事前交流として、10月中旬に各校が自己紹介・学校紹介・地域紹介をまとめた動画やポスターをオンラインで共有し、互いの生活について理解を深めた。さらに11月19日(水)には、3校合同で約2時間のオンライン交流会が行われた。生徒は英語で簡単に自己紹介をした後、5～6人のグループに分かれて、「教育におけるAI使用」や「多文化社会における文化保存」といったテーマについて英語でディスカッションを行った。社会的な話題について英語で話す難しさを感じながらも、生徒たちは積極的に意見を述べ、両国の社会への理解を深める貴重な機会となった。

2026年2月現在、ホワチョン高校の生徒とオンラインメッセージを通じて交流を進めながら、渡航の準備をしている。現地では、ホワチョン高校での交流と授業参加に加えて、シンガポール国立大学への訪問やシンガポール国立大学の学生との市内研修も行う予定である。英語のコミュニケーションスキル向上はもちろんのこと、シンガポールの社会・文化・教育への理解も深めてほしいと考えている。



3. 今後に向けて

今後は、海外渡航による国際交流のさらなる充実を図るとともに、対面およびオンラインを組み合わせ合わせた柔軟な交流形態を継続的に実施していくことが重要である。生徒が国際交流で得た学びを日常の学習や進路意識の向上へと結びつけられるよう、事前・事後指導の一層の充実を図っていききたい。

「筑駒らしさ」と国際教育

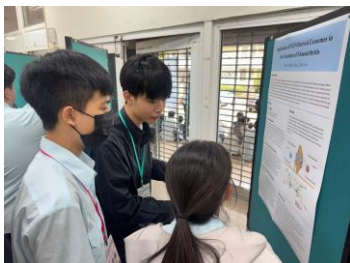
1. 本校の国際教育の特徴

本校の国際交流には柱となる2つの事業がある。研究交流を主軸とする台中市立台中第一高級中学との交流と、文化交流を中心とした韓国釜山国際高校との交流である。前者の交流では、両校の生徒の尖った知的好奇心を前提にした、主に理系分野の学術的な交流を実施する。本校生徒と共通点の多い台中一中の生徒との研究交流を通して、生徒たちは「筑駒らしい」特性を十二分に発揮し、切磋琢磨を通してさらに才能を伸ばす。一方で後者の文化交流は、いわゆる「国際交流」に近い。共通言語である英語を通して、お互いの文化や人間性に触れることで他者理解と自己理解を深める。一見、学術的に高度なやり取りをしている前者の研修の方が高い語学力を求められそうな印象があるが、共通の専門知識や数式などを拠り所にせず、純粹に言語によるコミュニケーションを求められる後者の研修では、相手校生徒たちの語学力の高さも相まって、実践的な語学力やコミュニケーション・スキルが求められることは本校生徒にとって盲点であるようだ。今年度は、さらにスイスという多言語国家で高度な理数教育を実施している Wettingen 高校との研究交流も実施した。筑駒生は国際教育を通して、筑駒生らしいインテリジェンスをさらに伸ばす一方、自らの強みと弱みを理解し、さらなる成長へとつなげる機会にしている。

2. 台中市立台中一中との研究交流

実施日時：2025年12月15日～20日

(1) 交流の概要



ポスターセッションの様子

台中一中からの本校訪問は隔年実施であり、本年度は受け入れの機会がなかった。本校からは、上記の日程で生徒20名と教員3名が訪台した。今年度はスイスの高校との研究交流も実施されたため、例年よりも台中一中との交流に参加する高校2年生が少なかった。そのため、高2課題研究で理系の研究をしている生徒だけでなく、部活動や個人で研究をする生徒にも英語で研究成果を発表する機会が巡ってきた。

研究発表をする生徒は研修への参加が決まる9月末から発表の準備を進める。12月上旬の期末考査の時期にポスターとスライドを完成させ、考査明けに発表練習を重ね、本番へと臨む。今年度は

本校ALTのMs. Copelandから指導を受けた後に、理系プレゼンテーションの専門家であるMr. & Mrs. Vierhellerから最終的な指導と助言を受けた。

台中一中での本番で大勢の聴衆を前に圧巻のパフォーマンスを見せる生徒もいれば、緊張しながらなんとか発表をやり遂げる生徒、英語での質問に先輩の助けを借りながら懸命に答える生徒もいた。台中一中生の発表は総じて研究内容のレベルが高く、デリバリーの質も高いために、派遣生徒は一概に大きな衝撃を受けたようであった。

台中一中の先生によると、そうした発表のほとんどは、台中の恵まれたリソースを背景に外部の指導や支援を受けているとのことであった。台中一中の林校長先生からは「筑駒生の研究は身近な疑問をテーマに自分の力で実行してお



アプリ制作過程の発表

り、高校レベルの探究学習として望ましい形だと思う」とコメントがあった。確かに、早期から超高校級の指導を受けられることは生徒にとって貴重な教育的機会である。しかし、それが大学の研究室の研究の一端を担うようなものになってしまうと、自ら課題を発見する機会を逸することになる。また、専門的過ぎるために、発表場で活発な質疑応答が起こりづらいという弊害もあり、中等教育レベルの研究指導の在り方について重要な論点であると感じた。

(2) 交流の詳細

		行程表
第1日目	12月15日	羽田空港から台湾松山国際空港へ 台北史跡見学（龍山寺、中正紀念堂）後、班別行動
第2日目	12月16日	台湾大学訪問 (キャンパス・ツアー、学生との交流、アドミッション・トーク)  台中へ移動
第3日目	12月17日	台中女子中との交流 ・ 歓迎セレモニー ・ キャンパス・ツアー ・ 文化交流（学校紹介、自国の文化紹介、ディスカッション） ・ バイリンガル授業体験（経済分野・写真→) 
第4日目	12月18日	台中一中との研究交流（第1日目） ・ 歓迎セレモニー ・ 文化交流（学校紹介など） ・ 授業体験（数学） ・ 研究発表、ポスターセッション①
第5日目	12月19日	台中一中との研究交流（第2日目） ・ 研究発表、ポスターセッション② ・ バディとの交流（近隣散策） ・ 学校行事を参観（English Song Competition） ・ 閉会セレモニー
第6日目	12月20日	台北へ移動後、松山国際空港より帰国

研究発表

Biology	The Reaction to Photic Stimulation of Zebrafish	守川 希宙（高2）
Biology	Analysis of Silk Proteins by SDS-PAGE	西村 輝（高1） 永井 宏（高1）

Information Science	Tsukukoma GO: An App That Simplified Our “Labyrinth School”	近藤 佐介 (高2)
Math	The Mathematics of Miura-ori	則包 遥 (高1)
Math/Physics	The Best Angle for a Basketball Shot	村田 康真 (高2)

(3) 生徒の声

・私が台中一中で最も強く感じたことを一言で表すなら、「発表のレベルの差」である。歓迎セレモニーからプレゼンテーション、エンディングに至るまで、すべての出し物の完成度が非常に高かった。バディによると理系の研究発表は普通の授業でもほぼ同じ内容を扱っているらしく、その専門性の高さにも驚かされた。しかし何より印象に残ったのは、一中生が皆スピーチにとっても慣れていることである。発表間の軽妙なやり取りや、ほとんどが原稿を持たずに発表している姿勢から、発表者としての態度や準備の厚さが伝わってきた。また、自主的に質問する生徒が多いことから、聞き手としての姿勢も模範的だと感じた。彼らは筑駒以外にも多くの学校と交流しているそうだが、そうした経験が人を歓迎してもてなす力を育てているのだろう。これらの模範的な振る舞いが台中一中を台湾屈指の高校にしており、筑駒が目指すべきあり方だと強く感じた。聞き手として質問を積極的にする姿勢は、私も今から真似できるのでぜひ実践したい。



数学の授業体験

今回の経験で得た学びを今後の学習や発表活動に活かし、学校全体の交流にも貢献していきたいと考えている。



コナンのコスプレで日本文化紹介

・研究発表のレベルの高さに驚いた。ほとんど理解できなかったが、英語を上達させて理解できるようになりたいと強く思った。

・姉妹校だからこそ出来ること（研究交流）は唯一無二の経験だった。民間の留学では、ただ他の国の人と会話をするだけであるが、台湾研修は台湾と向き合う良い機会になった。台湾の人がどのような思いで日々暮らしているのかを知り、台湾の教育を間近で実感出来たのが印象に残っている。

3. 釜山国際高校との文化交流

実施日時

受け入れ：2026年1月30日

訪問：2026年3月24日～28日（予定）

(1) 概要

釜山国際高校（BIHS）とは約15年間交流を続けている。毎年、1月または2月にBIHSの生徒が本校を訪問し、3月最終週に本校生徒が訪韓する際にBIHSを訪問する。昨年度は非常に高倍率であったことから、今年度は参加者枠を16名から20名に増やし、高校2年生10名、1年生10名が研修に参加している。

釜山国際高校との交流は、文化交流を主軸としており、英語ディスカッションによる相互理解や、バディ同士の親睦を深めることを重視したプログラム構成になっている。

11月下旬に研修メンバーに選考されると、まずは1月の受け入れに向けて歓迎セレモニーの内容や、文化交流で行うプレゼンテーションの準備を行う。今年度は、歓迎セレモニーで日本の伝統文化として獅子舞を披露し、好評を博した。文化交流では、日韓両国が共通して抱える社会課題について、両校生徒が独自の視点で問題提起し、ディスカッションを行った。2つのトピックを扱い、1つ目は

「高齢化社会」について、2つ目は「首都圏への人口一極集中」について、英語でプレゼンテーションとグループディスカッションを行った。筑駒の生徒は都内と隣接県に住んでいる一方、BIHSのある釜山はまさに人口減少に直面する地方都市であり、「地方に分散するにはどうすれば良いか」という筑駒生の視点に対して、BIHS生は「地方を再活性化するにはどうすればよいか」という逆の視点から問題を考えており、非常に興味深いセッションとなった。

(2) 交流の詳細

2026 BIHS Visit to TKKM	
Welcoming Ceremony @ 50th Anniv. Hall	
Part 1	
9:10	Opening Remarks by TKKM Student
	Opening Remarks by BIHS Student
	Welcoming Remarks by TKKM Principal
	Remarks by BIHS Vice Principal
Part 2	
9:25	TKKM School Introduction
	Welcoming Performances
~ 10:20	- BIHS School Introduction
Exchange & Interaction	
10:30	Students self-introductions & Neighbourhood Exploration
11:30	Lunch
Class Experience	
13:10-14:00	5th Period (Citizenship / Math / English)
14:10-15:00	6th Period (Citizenship / Math / English)
Cultural Exchange @50th Aniv. Hall	
15:30	Presentations on Cultural Differences by BIHS
15:45	Presentations and Discussions
	Session A : Aging Society
16:30	Session B: Population Concentration In the Capital Area
Closing Ceremony @50th Anniv. Hall	
17:15	Farewel Remarks & Closing Remarks



BIHS 生による学校紹介



筑駒生の獅子舞パフォーマンス



数学の授業体験



文化交流 (ディスカッション)



英語の授業体験

4. スイス Wettingen 高校との研究交流

実施日時

受け入れ：2025年10月2日～9日

訪問：2026年3月10日～16日（予定）



(1) 交流の概要

参加生徒：高校2年生 30名（理数系課題研究履修者）

Wettingen 高校など3年生 30名（18～20歳）

資金：Movetia (Wettingen 高校が獲得した助成金)

単年度での相互訪問研究交流である。筑駒と Wettingen 高校の生徒が8つのテーマに分かれ、共同研究を行った。Wettingen 高校が10月に訪日した際に研究を開始し、その後オンラインでやり取りしながら研究を進めた。最終的に、3月に筑駒がスイスを訪問した際に、最終発表を行う予定である。テーマは数学・統計、物理、IT分野を実社会に応用する内容で、以下の8グループに分かれて研究を行った。

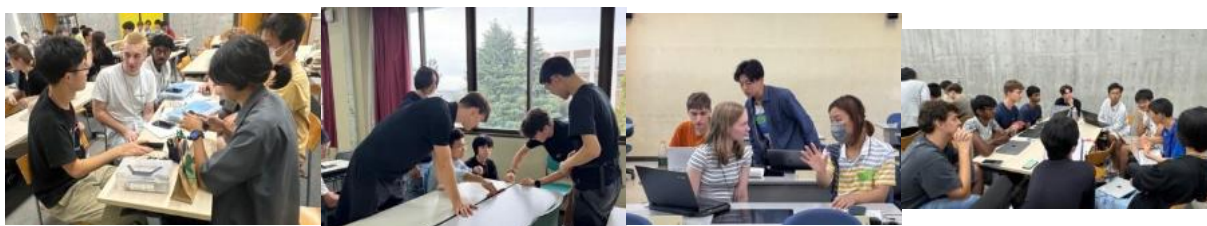
Group 1	Modeling the Population Growth of Japan and Switzerland Using ODE
Group 2	Scientific Compensation of the Exchange's Environmental Impact
Group 3	Modeling an Epidemic Using a System of Differential Equations
Group 4	Using Linear Programming to Optimize Diet and Production in Industry
Group 5	IoT Project (to be defined by the students)
Group 6	Advanced Algorithms for Solving Hard Problems
Group 7	Wings Across Borders - Design & Test Your Own Micro-Wing
Group 8	Quantum Quest: Searching the Unknown with Grover's Algorithm

(2) 受け入れの詳細

生徒29名（1名来日できず）と教諭3名（物理、数学、数学および物理）が来日した。交流の中心は、グループごとに進める探究学習で、グループに分かれて毎回3時間程度行った。

10月2日(木)	対面式と研究セッション①
10月3日(金)	研究セッション②
10月4日(土)	文化交流(稲刈り見学、折り紙)
10月5日(日)	校外での交流・レセプション・パーティ
10月7日(火)	研究セッション③
10月8日(水)	授業体験
10月9日(木)	研究セッション④

最初はよく知らない他校の生徒と英語でコミュニケーションを取ることに苦労していたが、研究セッション後に夕飯を一緒に食べに行くなどして交流を重ねるごとに、どんどん議論に活気が出ていった。研究テーマはWettingen高校の3人の先生が設定したもので、適宜生徒の議論に加わってアドバイスをしてくださった。



交流3日目の文化交流では、本校の教育活動の特色である稲刈りを見学してもらった。その後、折り紙研究部の生徒が企画して折り紙体験を行った。

交流4日目の日曜日には、両校の生徒が研究グループごとに遠足に出かけた。鎌倉方面に向かい、寺社などの日本文化と海を体験するグループが多かった。夜には筑駒の生徒が企画してレセプション・パーティを行った。両国にまつわるクイズや、ジャグリング部生徒のパフォーマンスがあり、大変喜ばれた。



交流6日目には、半日授業体験を実施した。バディの受講する授業と一緒に参加してもらった。歴史概論では、スイスと日本の第二次世界大戦への関わり方の違いや、両国の憲法における軍事力の扱いなどについて話し合った。他に、物理(実験)、化学(実験)、家庭科(消費者倫理について議論)、数学の授業に参加した。スイスとは異なる日本の学校文化(本校特有の文化も含む)にとっても驚いていた。



現在、生徒たちはオンラインでやりとりをしながら、最終発表に向けて研究を進めている。

(2) 訪瑞時の予定

第1日	3月10日	Zurich 空港到着。電車で Baden 駅へ。ホストファミリーと合流。
第2日	3月11日	CERN (欧州原子核研究機構) 訪問
第3日	3月12日	Wettingen 高校で授業体験、キャンパス・ツアー プロジェクトワーク、教員理数教育に関する発表
第4日	3月13日	ポール・シェラー研究所 (PSI) 訪問、最終プレゼンテーション
第5日	3月14日	文化交流 (班別にスイス国内の見学・観光)
第6日	3月15日	Zurich 発
第7日	3月16日	帰国

(文責 研究部・国際交流係 深宮美宇)

WWL 事業 2 年目の取り組み～総合学科の学びを活かした国際教育～

1. 本校の国際教育の特徴

附属坂戸高等学校では、平成 20 年に国際教育推進委員会（CIS）を設置して以来、総合学科の柔軟なカリキュラムを生かし、多角的な国際教育を展開してきた。ユネスコスクール加盟、学校設定教科「国際」の設置、「高校生国際 ESD シンポジウム」の主催など、地域と世界をつなぐ学びを継続してきた。

今年度は、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業の拠点校として 2 年目を迎えた。学校設定科目「グローバルライフ」での学びや、多様なバックグラウンドを持つクラスメイトとのかかわりなど、日々の学びの中に組み込まれている国際教育を発展させ、生徒が「グローバル社会において、自分自身は社会とどのようにかかわり、平和で持続可能な社会を実現するために何ができるか」を考え、より主体的に実践する環境づくりをすすめ、探究型の国際教育をさらに発展させた。

今年度からは二期制に移行し、オータムギャップ期間ができた。この期間を活用した WWL 事業の研修をマレーシア（コタキナバル）とタイ・カセサート大学附属高校との協働研修を新たに実施した。また、イオン 1%クラブによるティーンエイジアンバサダープログラム（マレーシア）への参加、第 14 回高校生国際 ESD シンポジウムの開催など、国際協働の幅が大きく広がった一年となった。

2. WWL 海外研修（マレーシア）

マレーシア研修には、愛媛大学附属高校から 6 名、筑坂から 7 名の計 13 名が参加し、コタキナバルを訪れた。現地高校 SMK Taman Tun Fuad との交流をはじめ、サバ大学（Universiti Malaysia Sabah : UMS）や筑波大学マレーシア校での講義などを通じて、多文化理解と探究的学びを深める多面的なプログラムを実施した。

訪問先の SMK Taman Tun Fuad では、生徒によるオランウータン保全活動のプレゼンテーションを参観したほかに、伝統舞踊の体験、混成チームによるグループ活動、理科の授業見学、学校裏山でのハイキングなど、多様な活動を通じて交流を深めた。言語や文化の違いを越えて協働する中で、生徒たちは互いの価値観や学びの姿勢に触れ、国際交流の意義を体験的に理解した。

研修の一部として、サバ大学を訪問し、生物多様性をテーマとした学習プログラムに参加した。大学研究者による講義や施設見学を通じて、熱帯生態系の特徴や環境保全の取り組みについて学んだほか、PCM（Project Cycle Management）手法を用いたワークショップにも取り組んだ。高校生自身が社会課題を整理し、英語でアクションプランを作成する活動は、探究的な学びをさらに深める機会となった。翌日には、IUCN レッドリスト掲載種であるテングザルやホタルの生息地：Kawa Kawa River を訪問し、自然環境と人間活動の関係について理解を深めた。また、クアラルンプールでは筑波大学マレーシア校で自然科学の講義を受けたり、入試制度についての説明を受けたりした。



SMK Taman Tun Fuadにて



Kawa Kawa Riverにて



筑波大学マレーシア校

3. WWL 海外研修（タイ）

タイでは、カセサート大学附属高校および愛媛大学附属高校と合同で、ココナッツ農園を題材としたフィールドワークを実施した。参加者は本校生徒6名、愛媛大学附属高校から3名、カセサート大学附属高校から14名、総勢23名が6つの混成グループに分かれ、エコツーリズムをテーマに農園で調査活動を行った。調査の後はバンコクに移動し、カセサート大学附属高校で成果発表会と交流活動を行った。



ラーマ2世記念公園にて

農園ではスタッフへのインタビューや自然環境の観察を通じ、地域産業の仕組みや課題を多角的に理解しようと協働して活動した。調査結果を踏まえて各班が探究テーマを設定し、夜には中間報告としてポスター発表を行った。カセサート大学附属高校からはサイエンス科と日本語科から生徒が参加しており、サイエンス科の教員からの助言は、生徒たちの探究をさらに深める契機となった。また、日本語学科の生徒が積極的に日本語を使ってコミュニケーションをとろうとする姿勢や、語学学習に対する意欲は本校生徒たちにも大きな動機付けとなった。研修の最終日には、カセサート大学附属高校に招かれ、最終発表会を実施した。各班が調査の背景、現地で得た知見、課題分析、提案を英語で発表し、参加者全員で意見交換を行った。異なる文化・教育環境で学ぶ同世代の視点に触れながら、協働の価値を再確認する時間となった。バンコクではカセサート大学附属高校の生徒・教員による市内案内があり、交流が深まった。

4. イオン1%クラブ ティーンエイジアンバサダープログラム（マレーシア交流）

イオン1%クラブのティーンエイジアンバサダープログラムに参加し、11月にはマレーシアの高校生10人が本校を訪れた。マレーシアの生徒たちは本校生徒の自宅にホームステイし、一日学校生活を体験した。生徒が中心となって企画した歓迎会ではクイズ大会を行ったり、剣道や合気道を披露したりして日本文化の紹介に努め、学校全体で国際交流に取り組む良い機会となった。1月19日からは、本校2年生10名がマレーシアを訪れ、バディの自宅にホームステイしたり、表敬訪問活動を行ったり、熱帯林での活動を行ったりした。表敬訪問では、首相官邸、日本大使館、国会議事堂を訪問し、外交や国際関係の現場に触れた。FRIM（マレーシア森林研究所）では、かつて錫採掘で失われた森が植林によって再生され、2025年に世界遺産に登録された経緯を学んだ。こうした相互訪問を通じ

て、生徒たちは「高校生による草の根外交」の意義を学んだ。



5. 第14回高校生国際ESDシンポジウム

11月15日には、第14回高校生国際ESDシンポジウムをオンライン・対面のハイブリッド形式で開催した。今年のテーマは「Voices for a Sustainable Future - Youth Leading the Change」で、海外からはインドネシア、タイ、マレーシア、フィリピンの高校生、国内からは愛媛大学附属高校や東京農業大学の学生が参加した。

分科会はネットワーク校の高校生たちの探究活動の発表に加え、APP（アジア・パルプ・アンド・ペーパー）やJICAと連携したものを実施した。企業・国際機関と高校生が協働し、社会課題に向き合う学びは、WWL事業の理念を体現するものとなった。海外の高校生の発表を参観したり、ワークショップに参加したりすることで生徒たちは自分たちこそが持続可能な未来の担い手だとの思いを強めたようであった。また、今年度は9月に訪れたSMK Taman Tun Fuadがシンポジウムでの発表に加わり、探究活動を通じた国際交流のネットワークが着実に強化されていることを実感できた。

シンポジウムに合わせてインドネシア教育大学附属高校から生徒2名、教員1名、IPB大学附属コルニタ高等学校からも生徒2名、教員1名が来校し、対面でシンポジウムに参加した。特にインドネシア教育大学附属高校の生徒は2週間本校生徒の自宅にホームステイしながら学校生活を体験したことにより、海外研修に参加していない生徒にとっても気軽に国際交流を経験できる良い機会となった。



JICAによるワークショップ

6. まとめと今後の展望

WWL2年目となる今年度は、マレーシア・タイでの協働研修、イオン1%クラブ交流が加わり、国際協働の幅と質が大きく向上した。生徒は、国境を越えた学びの中で、自らの探究を社会課題と結びつける力を育みつつある。また、オーストラリア研修・インドネシア研修（高大接続科目「国際農業研修Ⅶ」）、第2回インドネシア日本ユースSDGsフォーラム、アジア学院実習、SEA-Teacher受け入れなどこれまで行ってきた国際教育事業も継続して行われている。これらの活動はすでに参加した生徒が自らの学びをほかの生徒に共有することで毎年プログラムが発展していることが特徴的であり、生徒が自分の学びをデザインしていく総合学科の強みが活かされている。

来年度は、海外研修の継続と拡大、姉妹校との協働プロジェクトの深化、高大連携による探究の高度化、地域との国際交流の強化を進め、WWLの目標であるアジア版エラスムス計画実現を目指し、国際教育のネットワークを国内・海外の高校や大学とともに強化していく。

見えない壁を越えて！“つながる世界、広がる学び”

1. 本校の国際教育の特徴

2025（令和7）年度も筑波大学附属視覚特別支援学校（以下、本校）では、「児童・生徒の国際交流活動の推進」を目的とし、それぞれの学部で国際教育活動の実践が行われた。

本校はタイおよびインドの関係機関と国際交流協定を締結している。タイのタイ視覚障害者慈善財団（旧・タイ視覚障害者クリスチャン財団）とは、2025年1月に国際交流協定を再締結した。本年度は、交流協定第2期の初年度として、より発展的な交流事業を進めている。具体的には、後述する4および5に記載のとおり、タイの生徒と本校生徒との交流会や、本校生徒のタイ留学を実施している。これに加えて、教職員同士の交流も定期的に行っている。本年度は、視覚障害教育における体育、音楽、自立活動の教育実践についての情報交換会をオンラインで開催した。また、生徒の留学にあわせて本校教員1名が帯同し、ハジャイ盲学校において歩行指導に関するワークショップを実施した。当日は、同校で歩行指導を担当している教員のほか、ハジャイのあるタイ南部ソクラー県および近隣県で歩行指導・支援に携わる関係者が参加した。ワークショップでは、本校の歩行指導カリキュラムの説明や指導動画の視聴を通して、指導の目的やポイントを共有するとともに、タイにおける歩行指導の現状についても意見交換を行うなど、双方にとって大変有意義な機会となった。

また、本報告には記載していないが、JICA 筑波委託事業の一環として、北中米地域から来日している教育関係者の学校見学を受け入れた。当日は、本校におけるキャリア教育の取り組みおよびセンター的機能について紹介を行った。高等部体育のダンス授業の見学時には、参加者の方々にも授業に加わっていただき、日本の伝統文化である「盆踊り」を生徒とともに体験していただいた。生徒にとっては突然の交流機会となったが、盆踊りがもつ“誰でも気軽に参加できる”という特性を体験的に理解する良い機会となった。見学者からは、「見えない、見えづらい状況にあっても、隊形を乱すことなく、豊かな表現で踊っている姿が印象的だった」との感想をいただき、本校の取り組みへの理解を深めていただくことができた。



写真：タイ留学歓迎会の際、タイ視覚障害者慈善財団所長らと撮影

2. 小学部の活動について

小学部では、全学年で ALT との授業を、また、5年生を対象に、本校に在籍する鍼灸手技療法科留学生との交流会を実施した。ネイティブの英語に触れ、英語への興味・関心を高めるとともに、学習を活かし、主体的に学ぶ態度を育むことができた。また、多様な文化の存在を知り、自国の文化について理解することにもつながっている。

1・2年生は、年間で4回、ALTの授業を行った。簡単なあいさつや英語の歌、季節のクラフト制作などを通して、楽しく英語に親しんだ。すでに英語に関心のある児童もいれば、英語でのやり取りに緊張を見せる児童もいたが、授業が終わると「楽しかった。」という声が聞かれた。

3・4年生は、月に一度のALTによる授業を通して、日頃の学習で身につけた英語表現を実際に使う経験を積むことができた。授業のはじめには、ALTと英語であいさつをしたり、体調や自己紹介を伝え合ったりし、自分から英語で関わろうとする姿が見られた。学習している単元の表現を使った活動では、“What do you want?” “I want ～.” を使ったお店屋さんごっこに取り組み、コインを使いながら店員役・お客役になりきってやりとりすることができた。また“What do you like?” “I like ～.” の表現を使って、自分の好きなものをALTや友達に伝えることにも挑戦し、相手に伝わる喜びを感じる様子が見られた。歌やダンス、英語の絵本の読み聞かせでは、英語の音やリズムに親しみ、動作と意味を結びつけながら楽しく表現することができた。授業の終盤に行う季節のクラフト制作では、色や形、体の部位などの英語を確かめながら、ALTの英語の説明を聞いて制作を進めることができた。英語での指示を理解しながら取り組む経験を通して、聞く力も伸びている。これらの活動を重ねる中で、児童は英語を「人と関わるためのことば」として捉え、英語で話したり聞いたりすることへの抵抗感が少なくなってきた。異なる文化をもつ相手にも、自分からコミュニケーションを取ろうとする姿が増えてきている。

5・6年生も、月に一度のALTによる授業を通して、ネイティブの英語に触れる機会を設けた。児童は、ALTに教科書の文例を用いたスピーチを行った。ALTは、そのスピーチに関連した質問を行い、児童はこれまでの学習を活かして英語で応えることができた。また、児童は学校の行事についてALTへ伝え、ALTからはアメリカの学校の行事を教えてもらった。その中で、日本との違いに驚きながら、さまざまな文化を知ることができた。

本校に在籍する鍼灸手技療法科留学生との交流会は、鍼灸手技療法科1年生のモンゴル出身の留学生と、小学部5年生6名で実施した。留学生からは、モンゴルの伝統住居「ゲル」、気候、言語、食べ物などについての説明を受けた。「ゲル」については、模型をいっしょに観察しながら理解を深めた。児童からは、『ラクダ』をモンゴル語で言うと、日本語の別の言葉に似ているね。」等、さまざまな感想が出た。交流後は、児童から留学生に向けて手紙を書いた。これをきっかけに、モンゴルなど海外への興味が広がる機会となればと考えている。



1・2年生とALTとの授業の様子



5年生と留学生との交流会の様子

3. 中学部・高等部合同 グローバルカフェ 2025（第4回）について

国際経験豊かな本校関係者をゲストスピーカーとして招くグローバルカフェという企画を、2022（令和4）年より実施している。今年度は2025（令和7）年7月29日（火）にオンラインで開催し、高校生、専攻科生、教員が15名程度参加した。

今回は、Café1：本校卒業生で、中米コスタリカにて国立公園での環境保護活動、および現地の障害者自立支援センターや UNDP（国連開発計画）コスタリカオフィスでのボランティアを経験した A.O.さん、Café2：本校鍼灸手技療法科教員で、タイ・バンコクの視覚障害者職業訓練施設にてマッサージ技術を指導したほか、ロシアやメキシコにてホームステイを経験したりした R.O.さんのお二人をお招きし、それぞれのご経験について伺った。

生徒からは以下のような感想が聞かれた。（ ）内は、所属・学年とイニシャルである。

Café1 「興味があることは何でもやってみよう！ 失敗はネタになるよ」（本校卒業生の A.O.さん）

・できることがなさそうに思っても、自分にできることは何かを考え、積極的にやる、その姿勢が大切で、そして興味を持ったことに対し、情報を集めてどのようにすればできるのか考え、必要に応じて交渉をすることが大切だとわかりました。自分は何ができて、どんな時にサポートが必要なのか、しっかり整理して、まとめておこうと思います。（高1 I.T.）

・コスタリカの人々のやさしさについての話が特に印象に残りました。農業に関する研究をしていたとき、周囲の多くの人が協力してくれたというエピソードから、コスタリカでは人と人とのつながりがとてもオープンで温かいことがわかりました。それに比べて日本は、ハード面でのバリアフリーは整っている一方で、人と人との関わりにおけるやさしさはまだ十分ではないように感じます。日本も、もっと人と人がオープンに関われる社会になれば、ハード面のバリアフリーと人の心のバリアフリーが重なって、もっと生きやすい社会になるのではないかと思います。（専 T.K.）

Café2 「生活の中で言葉を“発見”すれば、世界中の人と繋がれる」（本校鍼灸科教員の R.O.さん）

・ホームステイについてのお話の中で、僕が思っていたよりも、ホームステイを受け入れてくれた家族の方々が積極的に関わろうとしていたのに驚きました。僕が想像していたのは、あまり話すようなこともなく、言語も違うから関わりづらいといったものでした。ですが話を聞く中で、ホームステイの中で、言語を知っていくというのが大事なのかと考えました。（高1 K.N.）

・言語は人々の生活の中の一部であり、必ずしも正しい文で会話しなくても伝わると知り、少しハードルが低くなった。これからは、間違いを恐れず、海外に行っても、現地の人々と積極的にコミュニケーションを取りたいと思う。（高1 W.C.）

・先生とは普段から授業で関わっていますが、海外でのお話はあまり聞く機会がなく、とても新鮮でした。日本とタイのマッサージの違いについて知ることができて楽しかったです。私も鍼灸科を卒業した後、海外へ行ってみたくくなりました。（専 K.M.）

本企画において視覚障害当事者の国際経験を聞くことが、視覚障害を理由に、つい自身の行動を制限してしまうこともある生徒たちにとって、新しい場所や人に出会うために一歩踏み出すきっかけになることを期待する。

4. 高等部 タイの盲学校・インクルーシブ校に通う高校生とのオンライン交流会

11月22日午後、タイの高校生とのオンライン交流会を実施した。トビタテ！留学 JAPAN の支援を受けて1月にタイへ留学する高等部2年の生徒3名と高等部1・2年の参加希望生徒4名とが参集し、レクリエーションも交えながら2時間ほど交流を楽しんだ。

生徒からは、以下のような率直な感想が聞かれた。（ ）内は、生徒の学年とイニシャルである。

・しゃべらなければ伝わらない（高2 H.S.）

・伝わらないかもしれないという不安があり、自分から話す勇気がなかなか出せなかったが、相手が一生懸命聞き取ろうとする姿勢を見せてくれたときや、自分の意図が伝わった瞬間には、とても大きな安心と嬉しさを感じた（高2 H.K.）

また以下の感想からは、国際人への一步として求められる、コミュニケーションの基本的な姿勢について、実感をもって意識できたことがわかる。

・視覚障害があると周りを見て真似をすることも難しいため、事前にイメージして準備することが大切（高2 H.S.）

・わからないときはわからない、もう一度話してほしいときは聞きなおすなど、間違いを恐れずに伝えることが大切だとわかった。また、伝わらなくても、きれいな文章ではなくとも、いろいろな言葉で言い換えたりしながらとにかく話すことが重要（高2 K.S.）

・国境を越えた繋がりをもつ相手が日本の文化に触れて親しんでくれているのに、日本人側がそれをわからないということは大変失礼だった。自分は一人の日本人として、日本のこと、特に有名な話題や伝統などを知っておくべきだと気づくことができた（高2 K.W.）

本交流会では、オンラインシステムという便利なツールのおかげで、遠く離れた国でありながら互いを身近に感じられた。その一方で、相手に興味をもって積極的に発言するという姿勢がなければ交流は成立しないということも、生徒たちはあらためて学ぶことができた。今後も、タイと日本との間で積極的な交流が続いていくよう尽力したい。



5. 高等部 タイ南部ハートヤイへの短期留学について（トビタテ！留学 JAPAN）

本校高等部では、文部科学省が主導する「官民協働による海外留学支援制度（トビタテ！留学 JAPAN）」を活用し、将来グローバルに活躍できる人材の育成を目的としたタイへの短期留学を企画・実施している。本校が国際交流協定を締結しているタイ視覚障害者支援慈善財団の協力を得て、盲学校やインクルーシブ教育校での授業参加、文化的行事への参加、現地での生活体験など、約2週間にわたる学習プログラムを構成している。

今年度は 2026 年 1 月 8 日から 24 日までの期間に、タイ南部ソクラー県ハートヤイ郡にある盲学校を拠点として留学を実施し、高等部 2 年生 3 名が参加した。生徒は盲学校の寄宿舎に宿泊し、現地校の生徒と同様の生活リズムで生活する中で、生活習慣や文化の違いについて実体験を通して学ぶことができた。

また、タイのインクルーシブ教育制度では、視覚障害のある生徒も通常、各教科の授業を普通校で受けることが一般的である。そのため、生徒たちは現地のインクルーシブ教育校において教科学習を体験させていただいた。さらに、当該校で開講されている日本語の授業には、本校生徒が講師として参加し、授業支援を行いながら交流を深める機会を得た。

休日には、周辺の文化的・歴史的に重要な名所やモスクを訪問し、現地の文化について学ぶ貴重な体験ができた。また、日本文化の紹介として、お味噌汁やお汁粉を作り、現地の生徒にふるまったこともあった。これらの活動は、留学期間の学びを一層豊かなものにした。

受け入れ校の校長先生からは、「今回が初めての留学生受け入れであったが、交流がタイの生徒にと

っても国際意識を高め、授業で学んだ英語を実践的に活用する貴重な機会となった」との言葉をいただいた。このことから、本留学は双方の生徒にとって多くの気づきと学びをもたらす、有益な機会であったと認識している。

本校の生徒たちが、今回の留学で得た経験を今後の学校生活に還元し、学校全体の国際意識の向上につながることを期待している。これらの学びを基盤として、これから直面するさまざまな課題に主体的に向き合い、解決へと導く力を育ていけるよう、引き続き教育活動の充実に努めていく。

以下、参加生徒感想の一部を掲載する。

・授業のスタイルが違うこと、意見をはっきり主張するところなど、今まで日本で経験してきたこととの違いに大きな刺激を受けた。積極的に話しかけてきてくれたおかげで、貴重な体験ができたと感じている。日本に戻りたくないと感じている。(高2 H.K.)

・お客さんではなく、学校の生徒として受け入れていただき、旅行では経験できないさまざまなことを体験させていただいたことに感謝している。(高2 K.S.)

・タイ人の優しさ、親切心に触れたことが今回の留学で一番の収穫と感じている。起床時間や入浴方法など、慣れない生活習慣に適應することが大変だったが、困ったときはいつも現地の生徒や先生が助けてくれたおかげで乗り越えられたと思う。逆の立場になった時に、自分も同じことができるように、留学後の生活で実践していきたい。(高2 H.S.)



写真は、留学期間中に日本文化を紹介しながら、現地の生徒と交流を深めている様子

6. 専攻科の国際教育活動について

本校専攻科における令和7年度の国際教育活動は、アジア諸国における視覚障害者の職業的自立の推進に寄与することを目的として、多角的かつ継続的に実施された。とりわけ、鍼灸手技療法教育を軸とした人的交流、教育実践の共有、及び視覚障害教育に関する相互理解の深化を重視し、国内外の教育機関・行政機関との連携を図った。

校内においては、令和7年12月1日に、本校に在籍する鍼灸手技療法科留学生と小学部児童との交流会を実施した。異文化的背景をもつ留学生と児童が直接交流する機会を設けることで、児童にとっては多様な文化や価値観に触れる学習の場となり、留学生にとっても日本の特別支援教育への理解を深める契機となった。

厳密には昨年度になるが、昨年度の報告書提出以降である3月に、インド共和国オディシャ州政府からの要望を受け、令和7年3月17～20日に、本校、筑波技術大学、日本点字図書館をはじめとする日本の視覚障害者教育関連施設の見学を企画し、訪問団の引率および通訳を担当した。日本の視覚障害教育・支援体制を体系的に紹介することで、今後の現地教育施策への具体的示唆を提供することができた。

令和7年8月4～6日、昨年度国際交流協定を結んだ、インド共和国全国盲人協会グジャラート支部を訪問し、本校により導入された日本式医療手技療法（以下 J.M.M.T.）課程の今年度卒業生に対し

て、筑波大学附属学校教育局長の署名を頂いた修了証の授与式を行うとともに、現地教員および卒業生を対象に、手技療法の治療技術向上を目的とした講義および実技指導を実施した。あわせて、全盲生徒でも安全かつ主体的に参加可能な化学実験の実演紹介を行い、理科学習の可能性を具体的に提示した（本校高等部理科教員と協同で活動）。

上記の活動に続き、インド共和国オディシャ州政府の要望に基づき同州を訪問し、全盲生徒も参加可能な化学実験の実演紹介を実施した。（本校高等部理科教員と協同で活動）現地教育関係者からは、視覚障害教育の幅を広げる実践として高い関心が寄せられた。

令和7年11月19日、本校鍼灸手技療法科生徒（1年生）と、本校が国際交流協定を締結しているインド共和国全国盲人協会グジャラート支部 J.M.M.T.学科の生徒（1年生）との間で、英語を用いたオンライン交流会を実施した。専門分野を共通項とした意見交換を通じて、国境を越えた学びの共有と実践的な語学活用の機会を創出した。

令和7年12月1日～5日、本校鍼灸手技療法科卒業生であり、現在モンゴルにおいて視覚障害児教育支援オユンラグセンターの代表を務める留学生からの要請を受け、日本の視覚障害者教育関連施設見学を企画した。本校、筑波技術大学、日本点字図書館等の見学を通じ、将来的なモンゴル国内での教育実践に資する知見の共有を図った。

以上の活動を通して、本校専攻科は、国際的視点に立脚した視覚障害者教育の発展と、職業的自立支援において重要な役割を果たすことができた。今後も、継続的な国際交流と教育実践の発信を通じ、視覚障害者教育の質的向上に寄与していきたい。（写真はインド共和国全国盲人協会グジャラート支部での筑波大学附属学校教育局長発行の修了証授与式の様子）



7. 本校のオリンピック・パラリンピック教育(ボルダリング体験を中心に)

今年度、本校では中学部・高等部の生徒向けにボルダリング体験を行った。特定非営利活動法人モンキーマジックから3名の講師を招き、実施した。体験は2回に分けて実施し、第1回は7月に高等部1年生を対象とした体験、第2回は12月に中学部1年生を対象とした体験を行った。

第1回となった高等部1年生を対象とした体験では、普通科・音楽科生徒16名が体験した。ほとんどの生徒が初めて体験する内容で、視覚に障害のある状態でボルダリングをするための工夫について学んでから実際に体験した。登る際にはガイドと呼ばれる晴眼者が声でサポートする。ガイドには「方向・距離・形」の3つの情報を伝える役割がある。「右上45度の方向、やや遠い位置に、パイナップルの形のホールドがあるよ」といった具体的な指示を頼りに生徒たちは登っていた。実際に体を動かしながら体験をしていくと、はじめは要領を掴むまでに時間を要していたが、徐々に体が慣れてきて、目標としていたゴール地点まで到達する生徒が続出した。課題は6段階+2コースあり、最難関のコースにチャレンジする生徒もいた。クリアすることはできなかったが、充実した表情を見せていた。「はじめはうまくいかなかったけど、体のバランスを意識して登るとうまくいった」「最難関のコースをクリアできていないから、またチャレンジしたい」などの感想が聞かれ、体験した生徒たちは一様にボルダリングの楽しさを感じることができた様子だった。

第2回となった中学部1年生を対象とした体験では、11名が体験した。生徒の中には小学校時代に

別の機会を利用してボルダリングに触れたことのある生徒もおり、それぞれの実態に応じた体験を実施した。第1回と同様、登る際の工夫とガイドの役割を確認して、実際に体験を行った。発達段階にある中学部生徒は高等部生徒に比べ「軽やかに」ホールドを登っていく様子が印象的だった。登っていく未知の怖さよりも自分の手で状況を変えていけることの楽しさが勝っているようで、次から次へと体験していた。体験も終わりに差し掛かるころに「もっとやりたい」「ずっと（体育は）ボルダリングがいい」などの声があり、非常に充実した体験をすることができた。

本校では年間のカリキュラムの中にパラリンピック種目として採用されているスポーツも教材に取り入れており、普段の体育活動を通して国際教育を実施している。また、高等部普通科生徒向けに、将来国際大会で活躍するアスリートを育成することを目的とした「アスリート育成プログラム」という取り組みを行っている。今年度は現役のアスリート育成プログラム生が国際大会や海外遠征に参加し、それぞれ優秀な成績を収めている。これらの活動も継続的に行い、生徒の学校生活をより充実させるための環境整備に取り組んでいきたい。



8. まとめ

小学生段階からネイティブ教員による英語に触れる機会を充実させるとともに、中高生段階ではイングリッシュルームの活用や留学機会の提供を通して、実践的に英語を活用する学習の流れを構築している。また、専攻科生徒の人材を活用し、小学部と専攻科留学生との交流を継続的に実施している。これらの取り組みを通して、「グローバルな視野をもち持続可能な社会を実現する人材の育成」や、「多様性を尊重しインクルーシブな社会を実現する人材の育成」につながるよう、今後も継続的に展開していきたい。

挑戦の先にひろがる世界

1. 本校の国際教育の特徴

本校における国際交流事業の目的は、海外の聾学校（フランス・韓国・台湾）との生徒相互訪問交流、オンライン交流、海外企業との連携、海外からの来校者を積極的に受け入れることを通し、国際的資質を育て、これからの国際社会に適応するグローバル人材の育成を目指している。また、卒業後、国際教育推進事業の経験を活かして広い視野に立ち、社会で活躍していくことを期待している。

2. 中学部の交流 【音楽やダンスをテーマに生き生きとした交流】

5月28日にソウル聾学校との2年ぶりのオンライン交流を行った。昨年度は都合により、絵手紙交流のみとなり、オンライン交流ができなかったため、2年生が中心となって交流を進め、その様子を1年生が参観するという形になった。

今回は両国の若者文化の紹介をテーマとしたので、K-POPなどが大好きで交流を待ちわびる生徒、上手にコミュニケーションが取れるのか不安に思う生徒、気持ちはさまざまだったが全員で「良い交流にしよう！」と準備を進めた。

はじめにソウル聾学校の生徒たちが自己紹介を行った。ユニークな自己紹介が続く中、日本の手話を覚えて使ってくれた生徒もいて、本校の生徒たちは大喜びだった。さらに韓国で流行っている曲に合わせてダンスを披露してくれた。ダンスの動画には歌詞の日本語訳もつけてくれて、どのような曲なのかがよく分かり、とても楽しめた。

次に、本校の生徒も J-POP に合わせたダンスを披露し、日本の手話の講座を行った。講座ではソウル聾学校の生徒も一緒に手話をしてくれて、大いに盛り上がった。最後の記念撮影では、生徒の提案で『それな！』のポーズをして写真を撮り、言葉や文化の壁を越え、楽しい交流となった。

本校の生徒からは「国が違っても、同じ手話が多かったので驚きました！」「指文字を使いながら自己紹介してくれたのが心に残っています」「ソウル聾の生徒のノリが良くて、言葉が違っても話しやすかったです」などの感想が聞かれた。

10年以上続くソウル聾学校との交流がこの先もずっと続いていくことを願っている。



(文責：廣瀬由美)

3. 高等部普通科の交流

【Discovery of Japanese School Life : 日本の学校を体験する一日】

今年度の高等部普通科とフランス国立パリ聾学校 (Institut National de Jeunes Sourds de Paris : 以下、「パリ聾学校」) との交流について報告する。

(1) 対面交流 令和7年5月23日(金)

① 高等部普通科1年生との交流

1年生は、パリ聾学校の生徒と本校の生徒が混合の6チーム対抗で、相撲やさくら、着物など日本文化をテーマにしたジェスチャーゲームや日本の手話クイズを行った。事前準備では英語で説明文を考え、本番でのスムーズなやり取りにつなげていた。

② 高等部普通科2年生との交流・昼食・清掃活動

2年生は、各学級にパリ聾学校の生徒が2名入り、昼食交流と体育館でのレクリエーション、清掃活動を行った。3クラス対抗でドッジボールや風船バレーを行った。食事をとりながら会話を楽しんだり、一緒に体を動かしたりすることでより親睦を深めることができた。

③ 高等部普通科3年生との交流

3年生は、日本文化の体験とジェスチャーゲームを行った。日本の伝統的な遊び(百人一首かるた、お手玉、けん玉、福笑い、折り紙)や書道、将棋などを紹介した。iPadに英語の説明を表示したり、見本を見せたりした。ジェスチャーゲームでは、パリ聾学校との混合チームをつくり、日本やフランスに関するお題や双方の生徒に共通するお題を考え、身振りやジェスチャーを工夫して伝えていた。

④ 部活動や寄宿舎における交流

高等部普通科での交流終了後、本校グラウンドで軟式野球部の体験を行った。軟式野球部の部員や顧問が中心となり、キャッチボールやバッティング練習を楽しむなどスポーツを通じた交流をした。

部活動体験後、寄宿舎で生活する生徒たちとともに夕食をとった。昨年度パリ聾学校を訪問した生徒を中心に、言語や文化を超えた心温まる交流が自然に生まれた。



(2) オンライン交流 令和7年12月12日、19日

12月に2回実施し、希望者5名が参加した。お互いの国の教育制度や学校紹介をテーマに、パリ聾学校と本校の生徒が交互に発表を行った。本年度、高等部普通科では国際手話の授業を実施したため、自己紹介では覚えた国際手話を活用しながら自信をもって伝える姿がみられた。必要に応じて翻訳機能を活用し、英語やフランス語でホワイトボードやiPadに書いて表示し、質疑応答を行った。

(3) まとめ

英語や手話、ジェスチャーなど、生徒自身が活用できるコミュニケーション手段を用いて、パリ聾学校の生徒とのやり取りを楽しんでいたことがうかがえた。今後は、さらに相互に考えを伝える活動を通してお互いの文化や価値観について理解し、コミュニケーションがより深まることが期待される。

(文責：榎戸里佳、澤口真弓、水野尾哲也、宮本亜希子)

4. 高等部専攻科の交流

【Local Hospitality, Connecting Culture : 地元ローカルでのおもてなし】

(1) フランス国立パリ聾学校交流（造形芸術科・ビジネス情報科）

① 事前学習

パリ聾学校との対面交流に向けて、事前学習を行った。学校からほど近い船橋市街を拠点とし、生徒が日常的に利用している店舗を交流の場とした。具体的には、簡単なフランス手話の学習に加え、交流場所となる百元ショップの製品の特徴や、ランチで訪れるしゃぶしゃぶ食べ放題の店舗における基本的なマナーや注意事項について班ごとに調べ、プレゼンテーションを作成した。

② 来校による対面交流 令和7年5月26日（月）

当日は校内で自己紹介とアイスブレイクを行った後、事前学習で準備したプレゼンを基に交流で訪れる場所や注意点について説明した。その後、学校から電車で船橋駅に移動し、少人数のグループに分かれて街中を散策した。特に百元ショップでは「これはどうやって使うの?」といった自然な形で会話が生まれ、楽しんでいる様子が見られた。筆談や翻訳アプリを活用することで、言語の違いを越えた意思疎通を図ることができ、はじめは緊張していた生徒も次第に表情が和らぎ、積極的に関わろうとする姿が見られた。交流を終えて生徒からは、「外国の生徒と話す機会は少ないためとても貴重な時間だった」「最初は不安があったが、翻訳アプリやジェスチャーで楽しく交流できた」「短い時間だったが友達のように過ごすことができた」といった感想が寄せられた。

(2) 臺北市立啓聰學校交流

【A Moment Experiencing Japanese Culture : 日本文化に触れるひと時】

専攻科では、台湾研修旅行（平成28年度、30年度）と美術作品交流（造形芸術科）を通して、臺北市立啓聰學校（以下、台北聾学校）と良好な関係を構築している。

① 事前学習

年度当初から主に教養英語Ⅰ・Ⅱにおいて、台北聾学校高等部生徒との自己紹介、文化紹介、メッセージや写真のやりとりを通じた交流を進め、互いの趣味や特技などについて知る機会を設けた。7月に台北聾学校より訪問交流の打診があり、本校としても貴重な機会と捉え、受け入れを決定した。2学期からは本格的に生徒たちによる交流内容の検討や校内案内、活動の流れについて、生徒たちがアイデアを出し合いながら準備を進めた。

② 来校による対面交流 令和7年11月7日（金）

11月7日、台北聾学校高等部の生徒8名と教員4名が来校した。初対面のため、当初は緊張した様子がみられたが、事前に自己紹介をメッセージで交換していることもあり、次第に笑顔が増え、穏やかな雰囲気の中で交流が進んだ。台北聾学校の生徒による手話歌の披露、両校の記念オブジェ制作、日本文化紹介として生徒が企画した駄菓子屋体験や校内見学、美術作品制作交流を行った。生徒からは、「翻訳アプリ機能を使って安心して会話できた」「日本と台湾で共通する手話があり、面白かった」「もっと交流の時間が欲しかった」といった感想が寄せられた。今回の交流は、継続的な事前交流を経て実現した対面での活動であり、互いの文化や考え方を理解し合う貴重な機会となった。言語を越えたつながりの大切さを実感するとともに、今後の国際交流への意欲を高める経験となった。



記念オブジェ

(3) 臺北市立啓聰學校交流（造形芸術科）

① 事前学習

造形芸術科では、台湾研修旅行並びに学校訪問に向けて学科独自の時間を設け、計画的に事前学習を行った。海外渡航時の注意事項の確認、台湾の文化や生活習慣、現地の地理や気候、交通事情などについて調べ、理解を深めた。また、訪問先である台北聾学校に渡すお土産品として生徒作品のイラストレーションを使用したポストカードやポップアップカード、また作品を掲載したオリジナルカレンダーを制作した。さらに、台湾留学経験のある旅行会社スタッフによる講演を聴講し、現地での過ごし方や文化的背景について学ぶなど、半年以上にわたり段階的に事前学習を重ねた。

② 訪台による対面交流 令和7年12月9日～12日

造形芸術科生は12月9日に台北入り、10日に台北聾学校を訪問した。現地では温かい出迎えと多くのおもてなしを受けた。午前中はラウンジで交流内容について説明を受けた後、小学部児童によるロボット操作体験、高等部生による美術作品紹介、レーザー彫刻加工ネームタグの彩色・組立て体験、そして昼食には高等部飲食科の生徒が心を込めて作った食事が振る舞われ、交流は和やかな雰囲気の中で進んだ。午後は高等部棟の施設見学を行った後、近隣の孔子廟を訪れ、美しい建造物を題材に写生交流を行った。夜には近隣の夜市を訪れ、台湾の食文化に触れる機会となり、交流内容は非常に充実したものとなった。

生徒からは、「台湾で再会できたことがうれしかった」「一緒に写生をした時間が心に残った」といった感想が聞かれた。造形活動を通じた交流は、文化や言語の違いを越えて理解し合う手段として有効であり造形芸術科ならではの国際交流となった。



(上) 臺北市立啓聰學校の歓迎会

(下) 孔子廟での写生交流

(4) 総括

専攻科における国際交流活動は、フランスおよび台湾の聾学校との交流を通して、生徒が異文化理解を深めるとともに、実践的なコミュニケーション力を育むことを目的として実施した。交流の場面では、生徒一人一人が、自分に合った手段で主体的に関わる姿が見られた。パリ聾学校との交流では、日本のローカルな生活空間を舞台に、日常的な体験を共有することで、自然な交流が生まれた。事前学習で準備した内容を実際の場面で生かしながら、言語や文化の違いを越えて関係を築く経験は、生徒にとって大きな自信につながった。また、台北聾学校との交流は、長年にわたる継続的な関係を基盤とし、オンライン交流から対面交流、さらに相互訪問へと発展してきた。本校訪問時には、生徒が受け入れ側として交流を企画・運営する経験を積み、相手を思いやりながら伝える力を養う機会となった。さらに、台湾での現地交流では、温かいおもてなしを受ける中で文化の違いに触れるとともに、造形活動を通して言葉を越えた深い交流を実感することができた。これら一連の取組を通して、生徒は国際交流を特別なものとして捉えるのではなく、人と人がつながる身近な営みとして実感するようになった。異なる文化や価値観を尊重しながら関わる姿勢は、今後の社会生活においても重要な資質であり、専攻科における学びの成果の一つである。今後も専攻科では、国際交流活動を継続し、生徒が多様な価値観に触れ、主体的に学びを深めていける機会を充実させたいと考える。

(文責：玉生美智子・福島恵美子)

附属大塚特別支援学校における国際教育の取り組み

1. 本校の国際教育の特徴

本校の国際教育の目的は、幼児児童生徒が自国や他国の文化に興味をもち、大切にしようとするとともに共に学び合うこと、教師が自国や他国の文化を尊重しながら互いの教育力を高めることである。

今年度も、指導計画のモデルを蓄積していくことを重点目標とし、知的障害教育における外国語教育の推進として外国語教育についての授業研究を進めている。

2. 本校の外国語（英語）学習

本校における外国語（英語）学習は、幼稚部から高等部まで各学部の実態に応じて実施している。まず、幼稚部と小学部においては、外国語（英語）学習の時間を週時程に位置付けるのではなく、ALTによるイングリッシュルームで英語の授業を展開している。したがって、幼稚部と小学部における外国語（英語）学習の様子や成果については、イングリッシュルームの報告書で述べる。次に、中学部と高等部では、ALTによるイングリッシュルームとは別に、週1時間の英語の時間を設け、英語を専科とする教員を中心に、学部在籍する生徒全員を対象として授業を行っている。したがって、ここでは、本年度の中学部と高等部における外国語（英語）学習に関する取り組みを報告する。

（1）中学部

中学部では、多様な実態の生徒が集団で学習しているため、全ての生徒が主体的に学習に参加できるような活動や、生徒が親しみを持ちやすい題材を選定することを意識した授業づくりを行った。今年度は、初めて外国語の学習に参加する1年生の興味関心に合わせて「動物」を多く題材に扱った学習を実施した。

1学期に実施した「英語であそぼう」（聞くことを中心とした単元）では、From Head To Toe（エリック・カール）の絵本を題材に選んだ。動物の名前や身体の部位を英語で話したり、「Can you do it?」の声掛けに応じて身体を動かしたりした。また、絵本の動物を指差して答える等、生徒の実態に合わせた表現の方法で、英語に親しみながらコミュニケーションを取ることができた。

2学期に実施した「英語で伝えよう」では、昨年度と同様に、ハロウィンやクリスマスなどの季節の行事と関連させながら、一般動詞の「like」「want」を使って、好きなものや欲しいものについて伝える活動を行った。さらに表現を加え、好きなもの・欲しいものについて、色や味、大きさなどを「It is ○○.」のように簡単に説明する活動を行った。2、3年生は繰り返し学習することで、より自信をもって伝えたり、語彙や表現の定着を図ったりすることができた。

3学期に実施した「英語で話そう」（話すこと〔発表・やり取り〕を中心とした単元）では、Walking Through The Jungle（Debbie Harter）を題材に選び、絵本に登場する動物の鳴き声を真似したり、絵本の中で見つけた動物を「I see the lion!」と言って発表したりする活動を行った。動物の鳴き声の違いに気付いて興味をもち意欲的に活動に参加している様子が見られた。単元の終わりには生徒同士で動物の鳴き声や色などをヒントに出しながら動物の名前を当てるクイズを行った。

また、年間を通して、生徒同士で「How are you?」とあいさつをして体調をお互いに伝え合う活動や、数字や日付、天気など繰り返し話す活動を行った。



これらの実践を通して、中学部の生徒の中には英語以外の授業でも、少し体調がすぐれないときなど、友達同士で“I'm sick.” “Get well!”といったやり取りをして、日常的に英語を使って表現しようとする姿が見られた。また、日本語と英語、またそれ以外の言語での表現が異なることに関心を持ち、外国人の来校者がある日には「〇〇語の挨拶は何だろう？英語でも大丈夫ですか？」と相手に合わせたコミュニケーションを取ろうとする姿が見られてきた。今後も、全ての知的障害のある生徒が楽しみながら外国語にふれたり、主体的に表現したりすることができるような活動の実践や、資質・能力を育成することができる授業を検討していきたい。（文責 宮林一葉）

（２）高等部

高等部では、学年ごとに週 1 時間の外国語（英語）の授業を実施した。年間を通してどの学年も共通して取り組んだことは、当番の生徒が授業の一部分を英語で進行したことである。

㊦ 始めの挨拶 “Let's start English class.”、終わりの挨拶 “That's all for today. See you.” を伝える。

㊧ “Mr. (Ms.) ~, How are you?” と一人一人に尋ねる。友達の返答を聞いて、“Me too.”、“I see.”、“Nice!”、“Wow!” など、応える。

㊨ 英語の歌を歌う前に、“Stand up please?”、“Are you ready?”、“Let's start!”、“Sit down please?” など掛け声を掛ける。

歌詞カードを見ながら友達に歌詞を伝え、歌の練習をする。

㊩ “Here you are.” と、友達に声を掛けながら、アルファベットカードやプリントを配る。

これらの活動に慣れてくるにつれ、当番を楽しみにする姿、英語を使いながら主体的に友達に関わる姿が広がった。

1 年生は中学部から英語の授業を積み重ねてきたことで楽しんで授業に取り組み理解度も高い。歌に合わせて身体部位名を学習したり、食べ物の英単語でカルタやビンゴをしたり、生活に身近な内容を取り入れて、さらに英語に親しめるような授業づくりを意識した。発語がない生徒は音声ペンを使用し、英単語を伝えられるように工夫した。2 学期には、“I enjoyed ~.” “I ate ~.” の表現で、長期休暇中の楽しかった出来事や食べた物を伝え合った。自分が発表するのはもちろん、発表を聞き内容を当てるリスニングクイズ形式にしたことで、友達の発表を意欲的に聞く姿が見られるようになった。

2 年生は言語表出が少ない実態の生徒が多いため、主体的に話したり聞いたりをしてほしいという思いで授業づくりを行った。“I like ~.” の表現で、自分の好きなものを選択肢のイラストから選び、友達に発表した。色、スポーツ、動物、海の生き物、花と 5 回にわたって同じパターンで発表する形式をとったことにより、自分の番には発表する、発表しないときにはリスニングする、と見通しをもって取り組む姿が見られるようになった。“Would you like ~?” “I'd like ~.” の表現を使って、カフェでのメニュー注文のやり取りを行った。食べ物の模型を使うことで、より実践的に、意欲的にやり取りをする姿が見られた。

3 年生は、アルファベットや英単語に親しみ、書いたり読んだりする活動にも楽しんで取り組むことができた。1・2 年生での既習事項を生かし、名前、年齢、好きなもの、得意な物などを織り交ぜて、英語での自己紹介を考え、発表することもできた。今後も、生徒が主体的に学習に取り組めるような授業を考えていきたい。（文責 長谷川浩子）



6年ぶりの台湾・国立和美実験学校訪問

1. 本校の国際教育の特徴

附属桐が丘特別支援学校では、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒の育成を目標に掲げ、国際教育の実践を行っている。

今年度は、本校高等部生徒代表が台湾・国立和美実験学校（以下、和美実験学校とする）を2019年度以来6年ぶりに訪問した。（写真1、2）また、本校小学部児童のJICA地球ひろば訪問や本校高等部生徒の筑波大学留学生との交流も継続して行った。



（写真1）



（写真2）

2. 国際交流活動報告

（1）和美実験学校訪問

1) 事前オンライン交流

和美実験学校と直接交流するにあたり、令和7年11月4日3校時に事前オンライン交流を行った。本校高等部1、2年生14名と和美実験学校高中部（日本でいう高校）生徒18名がZoomをつなぎ、インタラクティブなやり取りをした。

前半は自己紹介をした。高中部の生徒18名は、日本語を3か月学習しており、名前と好きなものを簡単な日本語で述べた。本校は、台湾を訪問する生徒代表1名が英語と簡単な中国語で自己紹介をした。事前にビデオ等を用意するのとは違い、リアルタイムのやり取りには字幕等がない。画面の向こうで、日本語教師と中国語で「これは日本語で何と言えばよいか」等とやり取りしながら相手が自己紹介するのを聞いた。

後半はKahoot!というアプリで3択クイズを行った。高中部の生徒が日本のアニメや台湾の有名な食べ物等について問題作成をしたものを使用した。モニターに表示されたQRコードを各自のタブレットで読み、和美実験学校の出題者以外と本校の生徒全員が回答者として参加した。日本語と中国語と英語が飛び交い、順位を競って盛り上がる様子が見られた。この時間帯は、日本人は日本人同士で話す形で、あまり両国の生徒同士の直接的な会話は見られなかったが、全体的に楽しい雰囲気であった。

今回の事前交流では、本校は生徒代表の簡単な自己紹介を除きスライドやビデオ等を準備しなかった。このことでより即時的な会話をする機会ができたように思う。前半と後半で活動に静と動のコントラストがあり、実際の訪問に向けてよいウォーミングアップとなった。

(表1)

	月/日	都市	現地時間	手配内容
1	11/23 (日)	羽田 羽田発 松山着 台北 台中	7:20 9:20 12:30 14:00 14:31 15:20 15:40頃 19:00	羽田空港第2ターミナル3F国際線出発ロビー周辺 NH851便、機内で昼食 松山空港着、両替 公共交通機関で台北駅へ 台北駅発、台湾高速鉄道(137便、普通指定席)で台中駅へ 台中駅着、公共交通機関で富信ホテルへ 富信(フーシン)ホテル着。ホテル周辺レストランで外食。 翌日の準備
2	11/24 (月)	台中	7:30頃 8:50 9:15 10:00 13:30 14:00頃 15:00 15:59 20:00	ホテルにて朝食 通訳と合流(夕方の台中駅まで同行) ホテル出発、 <u>和美実験学校訪問</u> (スクールバス) 交流 和美実験学校で昼食 和美実験学校発(スクールバス) 台中駅着 台中駅発、台湾高速鉄道(648便、普通指定席)で台北駅へ 台北駅着、公共交通機関で台北市内の夜市へ 花華(フローラ)ホテル着。荷物整理等帰国準備
3	11/25 (火)	台北 松山 松山発 羽田着	7:30頃 9:00 14:30 16:50 20:40 21:30頃	ホテルで朝食 チェックアウト 公共交通機関で台北市内観光、買い物、昼食 松山空港着、両替、買い物 NH854便、機内で夕食 羽田空港第2ターミナル2階国際線到着ロビー周辺で保護者と合流、解散

2) 和美実験学校

和美実験学校は肢体不自由児を対象とした特殊教育学校だが、高中部には健常者も通学するユニークな学校である。普通科や体育科の生徒と融合教育を謳い、バリアフリーの徹底されたキャンパス内で、学科や学年を超えてチームを組み学習している。

台湾の教育部(日本でいう文部科学省)のホームページには、以下のようにある。「台湾には通常校が3,012校あり、その中に特殊教育学級は5,896学級ある。また、特殊教育学校は28校、643学級ある。特殊教育を受ける児童生徒は182,746人おり、そのうち154,151人に障害がある。15,747人が大学・短大に在籍し、138,404人が幼稚園・保育園を含む高中部以下に在籍している。そのうち96.86%にあたる134,054人が通常校に在籍しており、3.14%にあたる4,350人が特殊教育学校に在籍している。通常校に在籍する134,054人のうち90.54%にあたる121,366人が通常学級、通級指導教室、巡回指導のいずれかで学んでおり、9.46%にあたる12,688人が拠点校方式の特別支援学級で学んでいる」

(2023年度時点)(英文を和訳) https://stats.moe.gov.tw/files/ebook/Education_in_Taiwan/2025-2026_Education_in_Taiwan.pdf

以前は、国立南投特殊教育学校も訪問する3泊4日の旅程だったが、今回は和美実験学校のみ訪問したため、2泊3日となった。両校とは2016年11月に交流協定を締結し、5年経過した2021年に協定が失効してしまっていた。2校のうち、コロナ禍においてもオンライン交流や教員間のメールのやり取りを継続していた和美実験学校に交流協定締結を提案し、快諾された。

(表2)

NOV. 24,	活動行程	Activity/Event
9:10	校車至 台中富信飯店	School bus to hotel
9:15-9:55	車程 45 分鐘	45-minute drive
09:55-10:00	迎賓	Welcome
10:00-10:10	雙方校長致詞(各 5 分鐘) 贈送紀念品	Welcome Addresses by Both School Principals (5minutes each) Presentation of Souvenir
10:10-10:30	學校簡報 (各 10 分鐘)	School Presentations (10 minutes each)
10:30-10:40	雙方校長簽署姊妹校文件、 合影	Signing of Sister School Agreement by Both Principals, Group Photo
10:45-11:10	校園特色、無障礙設施、圖書 館等介紹	Introduction to Campus Features, Barrier-Free Facilities, Library, etc.
11:10-11:40	課程參與	Participate in the course
11:45-12:00	介紹彰化和美小吃	Introduction to Changhua Hemei Local Snacks
12:00-13:00	用餐	Lunch (Hemei students*6)
13:10-13:30	座談交流、贈伴手禮	Q&A Presentation of Gifts
13:30-	珍重再見	Farewell
13:30-14:00	車程約 30 分鐘	30-minute drive

3) 台湾訪問生徒代表の選出

第1学期終わりに本校高等部1、2年生を対象として、生徒代表の募集をした。「台湾交流において代表として自分ができること」という題で作文を課した。夏季休業明けに6名の応募者があった。その後、本校高等部会で話し合い、投票の結果1名の候補者と2名の補欠候補者が選出された。話し合いの際は、「台湾訪問の機会が本人の成長や学習意欲の向上につながるか、また、その成果が校内に還元されるか」が焦点となった。生徒らには肢体不自由があるが、障害の程度は選考に影響していない。生徒1名に対して、教員が2名同行する体制を組めたため、台湾のバリアフリー状況で安全に介助ができると判断できたからである。

生徒代表となった高等部2年生の男子生徒は、自身の立ち上げた株式投資の同好会や趣味の野球の話がしたいと書いていた。海外渡航は初めてで、応募と同時にパスポートを申請したという。生徒代表が男子に決まったため、同行者は校長と本校高等部の三浦教諭という男性2名体制となった。

4) 和美実験学校訪問

令和7年11月23日から25日の3日間、台湾を訪問した。旅行社作成の旅程表を掲載する。(表1)11月23日の朝に羽田空港に集合し、台湾へ出航した。台湾高速鉄道に乗る際に通訳と合流し、和美実験学校により近い台中まで移動した。

和美実験学校作成の訪問当日の時程を掲載する。(表2)朝から和美実験学校の送迎車に乗り、10時から13時半まで学校見学をした。最初に、両校の校長が挨拶し、記念品を交換した。それからスライドを使い、校長が両校の



(写真3)



(写真4)



(写真5)



(写真6)



(写真7)



(写真8)

学校紹介をし（写真3）、交流協定書の調印式があった。（写真4）その後、キャンパス設備を見学した。（写真5、6）昼食は、生徒同士で集まり、刈包（グアバオ）という台湾式ハンバーガー等を味わった。（写真7、8）生徒代表は、この時間について「若い男性の先生が英語で話を振ってくださり、それに対して頑張って英語でしゃべったのはかなり良い経験だったと感じており、生徒同士でもう少し話すことができると、より良かったと今は思う。（中略）英語力の重要性を痛感し、リスニングやスピーキングに苦労もあったが、実際に英語を使ってみる経験ができたのは素晴らしかったと思う。和美での昼食は、僕にとってまとまった量の英語の会話をした初めての経験になった」と振り返った。和美実験学校訪問後は、高速鉄道で台北駅に移動し、夜に九份を見学した。

25日は、故宮博物館や自由広場を見学してから帰国した。



(写真9)



(写真10)



(写真11)



(写真12)

5) 中・高等部台湾訪問報告会

令和8年1月13日5、6校時に中・高等部で台湾訪問報告会を行った。当日の給食は、台湾訪問の生徒代表インタビューが掲載された給食ミニ新聞と共に、ルーローハン等の台湾料理が出された。

(写真9、10) 喫食後に体育館に集合し、台湾訪問についてのスライド発表があった。参加した中・高等部の生徒からは、「一番おいしかった食べ物は何ですか」等の質問があり、久しぶりの直接訪問に刺激を受けている様子だった。生徒代表は答えの中で「給食のルーローハンはとてもおいしい」と述べ、台湾では味付けの違いを感じたと話した。

(2) 筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流

令和8年1月20日5、6校時に、筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流を本校高等部の総合的な学習の時間において実施した。打ち合わせはオンラインで行い、当日は対面で活動した。

留学生の出身国は、韓国、フィリピン、インド、スリランカ、ジンバブエ、ナイジェリア、モザンビーク、アルゼンチン、ブラジルであった。

本校高等部1年生から3年生27名が3グループに分かれて、留学生と活動した。当日は、教室に留学生が数名ずつ入り、一緒に昼食をとり、(写真11)「日本の観光名所を紹介する」「日本語学習教材として作成したカードゲームを紹介する」(写真12)「だるま落としや坊主めくり等日本の遊び



(写真1 3)



(写真1 4)



(写真1 5)



(写真1 6)

を紹介する」という企画に分かれた。それぞれ「お互いの歴史ある観光地を知り、行ってみたい・来てほしいといった気持ちにできるようにわかりやすく伝え交流をする」「海外の文化を知る、日本の文化を知ってもらう」「遊びを通して共通点や相違点について知り自国（日本）の魅力を確認する」等と目標を立てた。留学生が出身国について紹介する時間もあった。(写真1 3) 留学生が作成した紹介スライドは当日、廊下に掲示した。(写真1 4)

後日の振り返りで出た意見を次に挙げる。「簡単な英語でも、ジェスチャーや身振り手振りを使って話してみれば意外と伝わるのがわかった」「外国にもまた別の独自の文化があるんだと思った」「(個人目標は) 達成できた部分もあれば出来なかったこともあると思う。なぜなら英語が分からなくても頑張って伝えようとしたが沈黙が続いてしまったりしたから」

(3) JICA 地球ひろば訪問

令和8年1月23日に、本校小学部の6年生5名が社会科の校外学習として新宿区市谷本村町にあるJICA地球ひろばを見学した。(写真1 5、1 6)

訪問後の児童の感想をいくつか次に挙げる。「民族衣装を着てみたが、重かった」「日本から輸出されている「蚊帳」が中国やモンゴルなどにも届いているのは驚きだった」「地球ひろばに行って、日本以外の国のやり方とか体験ができて、とても面白かった。水汲みなどでは、労力が想像以上にかかることに気付いた」「日本は当たり前のいろいろなことが、世界では当たり前ではないことがわかった。例えば、日本では、蛇口をひねれば水が出てくるが、外国では、かなり遠方まで水を汲みに行かなければいけない」

附属久里浜特別支援学校の国際交流

I. 本校の国際教育の特徴

本校は、例年、海外から多数の視察を受け入れ、授業の様子を実際に参観してもらうとともに、幼児児童と来校者が活動を通して触れ合う機会を大切にしながら、国際交流を進めてきた。新型コロナウイルス感染症の影響により、一時期は海外からの視察や見学の受け入れが困難な状況が続いたが、令和3年度以降は段階的に再開し、幼児児童が海外や海外の人々に親しむ機会の確保に努めている。

現在は、海外からの来校者のニーズに応じて、本校の特色である自閉症教育に関する講義、幼児児童の活動の参観、ならびにそれらを基にした意見交換を組み合わせた研修・視察プログラムの充実を図っており、日本における自閉症教育の実践や考え方を国際的に発信する取組を継続している。

また、来校型の国際交流に加え、オンラインを活用した継続的な交流にも力を入れている。とりわけ、中国の国際協力協定締結校である達敏学校とのオンライン交流については、令和5年度に開始して以降、今年度で3年目を迎えた。当初は実践紹介や意見交換を中心とした教師間の交流を主としていたが、近年は幼児児童同士の交流にも重点を置き、交流内容や方法の充実を図っている。昨年度より、オンライン交流を単発的な行事として捉えるのではなく、教育課程上に明確に位置付け、事前・当日・事後の取組を一連の学習として構成する試みを行っている。幼児児童の発達段階や実態に応じて交流の在り方を検討する中で、活動時間や内容、視覚的な工夫、教師の関わり方など、オンラインの特性を生かした交流の方向性が徐々に明確になってきている。

このように、対面による交流とオンライン交流を効果的に組み合わせ、国際教育を推進している。

II. 活動報告

1. 受け入れ型研修の特徴と成果

本校では、海外からの視察・見学の受け入れについて、主として教師間の交流を通じた研修の機会として位置付け、海外視察プログラムの充実を図っている。令和7年度は、JICA研修をはじめ、アジア、中央アジア、中南米など複数の国・地域から教育行政関係者や大学教員などを受け入れ、多様な立場の関係者と特別支援教育に関する意見交換を行った。

各視察においては、学校概要の説明に加え、幼稚部・小学部の授業の様子や構造化された教室環境など、本校の特色ある教育実践を参観してもらった。見学中には、偏食への対応や感覚過敏への支援、パニック時の関わり方など、具体的な質問が多く寄せられ、国や制度の違いはあっても、共通する課題意識をもって教育に取り組んでいることが確認された(表1)。

また、視察の場面では、幼児児童が日常の活動や学習に取り組む姿を通して、海外の来校者と自然に同じ時間と空間を共有する機会が生まれている。幼稚部では、自由遊びや運動遊びに取り組む幼児の姿に対して拍手や笑顔が交わされる場面が見られ、小学部では、音楽や栽培活動などを通して、児童の主体的な表現や意欲的な学習の様子に強い関心が寄せられた。このような直接的な関わりは、子供たちにとっても、海外の人々に親しみをもち、安心して他者と関わる貴重な経験となっている。

さらに、質疑応答や意見交換を通して、本校の教育実践を言語化し、説明する過程は、教師にとって自校の取組を改めて整理し、強みや課題を再認識する機会ともなっている。受け入れ型研修は、海外への情報発信にとどまらず、本校の教育の質を高めるための教師にとっての学びの場としても重要な役割を果たしている。今後も、教師間の専門的交流と、幼児児童にとっての自然な国際交流の双方を大切にしながら、受け入れ型研修を通じた国際教育の充実を図っていきたい。

表1 令和7年度海外視察・見学の概要

時期	国・地域	機関・団体名	人数	主な内容
4月	モンゴル	国立障害児リハビリテーション開発センター 政府実施機関教育総局	11人	学校概要説明 施設見学 幼稚部・小学部授業参観 環境設定の工夫に関する説明
5月	カザフスタン	カラガンダ州教育局	27人	学校概要説明 施設見学（寄宿舍含む） 幼稚部・小学部授業参観
5月	中国	北京師範大学 温州大学	2人	学校概要説明 施設見学 幼稚部・小学部授業参観 自閉症教育に関する意見交換
5月	キューバ	キューバ日本人連絡会	6人	学校概要説明 施設見学 幼稚部・小学部授業参観 自閉症の理解と支援の説明
11月	中南米7か国 （ベリーズ、ウルグアイ、ペルー等）	JICA 研修員（各国教育省・ 教育行政機関）	10人	学校概要説明 幼稚部・小学部の授業参観 施設見学 インクルーシブ教育に関する 説明と意見交換



学校概要説明



教室環境の工夫



幼稚部（左）と小学部（右）の授業参観



幼児と来校者の触れ合い

2. 遠隔支援コンサルテーション事業の取組と成果

本校は、海外子女教育振興財団が推進する在外教育施設重点支援プラン（AG+）に参画し、遠隔支援コンサルテーション事業を通して、在外日本人学校における特別支援教育およびインクルーシブ教育の充実に取り組んでいる。本事業は、オンラインを活用した継続的な支援を基本としつつ、必要に応じて専門性の高い教師が現地を訪問し、実地での助言や協議を行う点に特徴がある。

（1）オンラインによる研修会の実施

本年度は、上海日本人学校虹橋校の教職員を対象に、オンラインによる研修会を実施した。研修では、本校小学部主事が講師を務め、「発達障害の理解と対応—通常学級にいる支援を要する児童への支援のヒント—」と題し、発達障害の基本的理解と、学校現場ですぐに生かすことのできる支援の視点について講義を行った。研修の目的は、発達障害に関する理解を深め、教師一人一人の「支援の引き出し」を増やすことであった。本校は知的障害を伴う自閉症児を主な対象とする学校であるが、自閉症教育の実践を通して蓄積してきた行動理解や環境調整の視点は、通常学級に在籍する支援を要する児童への対応にも有効である。本研修では、行動の背景を整理する視点や、問題行動そのものをなくそうとするのではなく、望ましい行動を育てるという考え方を、具体的な事例を交えて紹介した。研修後の感想からは、「知識をもつことで対応の幅が広がるのが分かった」、「児童の行動を多角的に捉える視点を得た」、「通常学級の指導にも役立つ内容だった」などの声が多く寄せられ、研修の目的が達成されたことがうかがえた。一方で、オンライン研修のみでは、児童の実態や学級環境を十分に共有することが難しいという課題も明らかになった。

（2）訪問コンサルテーションの実施と成果

こうした課題を踏まえ、遠隔支援コンサルテーションの中核として、上海日本人学校虹橋校への訪問コンサルテーションを実施した。訪問では、授業や学校生活の様子を観察し、特別な配慮を要する児童を中心に、教室環境、指示の提示方法、教師の関わり方、周囲の児童との相互作用などを総合的に捉えた上で、専門的な視点から助言を行った。訪問期間中は、複数の学年・学級において観察とフィードバックを繰り返し実施し、担任や学年主任に対して、具体的で実践的な手立てを共有した。また、学校全体を対象とした研修会を通して、行動分析の考え方を基に、学校として共通理解を図る機会を設けた。これにより、個々の児童への対応にとどまらず、学校全体の支援体制を見直す視点が育まれた。訪問コンサルテーションの大きな成果は、オンラインでは把握しきれなかった学校環境や集団の中での児童の姿を直接確認し、その場で教師と対話しながら支援の方向性を検討できた点にある。実際に専門的な知識を有する教師が現地を訪問したことで、教職員にとって大きな安心感や学びにつながり、特別支援教育やインクルーシブ教育の重要性を学校全体で再確認する機会となった。今後は、今回の訪問で得られた知見を基に、オンラインと訪問を組み合わせた遠隔支援コンサルテーションの在り方をさらに検討し、在外日本人学校の実態に応じた継続的な支援体制の構築を目指していきたい。

3. 中国達敏学校との交流

中国浙江省寧波市に所在する達敏学校は、2010年全中国特別支援教育の中で優秀教育学校に選ばれ、2011年には全中国の特別支援学校の研究指定校として、研究発表会を開催した。特別支援教育に関して、中国を代表する学校の一つである。2013年には、中国で初めて自閉症児を対象とする幼稚部を新設する等、先進的な取組を実施している。達敏学校と本校は、2011年から2021年まで姉妹校協定を締結し、教員が相互に訪問して交流を重ねてきた。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、交流活動は中断していたが、オンラインを活用して交流を再開し、姉妹校協定を再締結した。

(1) 日本の自閉症教育に関するオンライン研修会の実施

本校は、姉妹校である達敏学校と連携し、同校の教職員・保護者および近隣の幼稚園教員を対象としたオンライン研修会を実施した。研修は、日本における自閉症教育の最新の知見について講義してほしいとの依頼を受け、本校幼稚部主事が講師を務め、「日本における早期自閉症教育の実際」をテーマに90分の講義を行った。講義では、近年日本で関心が高まっている強度行動障害を取り上げ、幼児期からの予防的支援の重要性について、本校幼稚部における具体的な実践を基に説明した。研修にあたっては、達敏学校が専門の通訳者を配置し、逐次通訳を行いながら進めた。質疑応答では、幼稚園教諭から幼児のアセスメント方法に関する質問が出るなど、参加者の関心は高く、活発な意見交換が行われた。本研修は、日中双方の自閉症教育に関する理解を深めるとともに、早期支援の意義を共有する有意義な機会となった。

(2) オンラインでの児童間の交流

①目的：本交流は、中国達敏学校の児童とのオンライン交流を通して、異なる国の文化や生活に親しみを持ち、相手に伝える経験ややり取りする楽しさを味わうことを目的とした。また、写真やイラスト、身振りなどを用いて表現する活動を通し、児童が「伝わった」「分かり合えた」という達成感を感じることをねらいとした。

②対象：本校小学部5年生6名と、中国達敏学校4生の代表児童6名を対象とした。中国達敏学校の4年生には知的障害を伴う自閉症のある児童が複数名在籍していた。

③教師による打合せ：交流にあたっては、両校の国際教育担当者と担任教師を中心に、オンラインツールを活用して複数回の事前打合せを行った。単元全体の構成や当日の活動内容、使用教材、役割分担について事前に丁寧に確認し、児童が安心して参加できるよう支援の方法や提示の仕方を共通理解した上で当日を迎えた。

④主な内容：交流は、生活単元学習「いきいきタイム」における単元「中国と交流しよう」の中に位置付けて実施した。今年度は、年度当初の年間指導計画作成段階で交流を単元に組み込み、事前学習・交流当日・事後の振り返りまでを一連の学習として計画的に構成した(表2)。交流を行うにあたり、中国について調べたり、交流で使用するイラストカードやクイズ用教材を制作したりしたほか、本番を想定した環境設定の中で発表ややり取りの練習を行った。

⑤オンライン交流当日の様子：当日は、写真やイラスト、めくり式カードを用い、自分の好きな物をクイズ形式で紹介し合う形で交流を進めた。児童は、活動の流れや発表順が示されたボードを確認しながら、一人ずつ前に出てクイズを出題した。教材はモニターの中央に提示するなど、相手に伝わりやすい提示の仕方を意識する姿が見られた。クイズの場面では、好きな物のシルエットを見せただけでは相手が正解できない場面もあったが、その際、児童は教師と一緒に「どうしたら伝わるか」を考え、身振りで示しながら表現を工夫していた。画面越しの相手の反応を見ながら、ジェスチャーを変えたり強調したりし、伝わるまで様々な表現を試みる姿が見られ、相手に伝えたいという意欲が行動として表れていた。相手校の児童や教師が拍手や正解を表す札を挙げて反応を示すと、児童は笑顔を見せ、伝わったことを実感している様子であった。活動の終わりには、相手の国の言葉で挨拶を交わし、達成感とともに交流を締めくくることができた。

⑥単元を通じた児童の変容：単元を通して、児童は相手国の児童に親しみを持ち、オンラインという環境の中でも安心して関わる姿が見られるようになった。事前学習で繰り返し経験した発表ややり

取りが、本時の活動に生かされ、自分から相手に伝えようとする姿勢が育ってきたと感じられる場面があった。また、交流を重ねる中で、せりふの統一や教材の工夫、視覚的な支援の在り方が整理され、児童同士が関わるための分かりやすい交流の形が蓄積されてきた。国際教育を教育課程上に位置付け、計画的に実施したことで、単発的な体験にとどまらず、児童の学びや意欲の広がりにつながる交流となったと考える。

表2 小学部5年生「いきいきタイム」(生活単元学習)における中国に関する学習

単元名	時期・時数	主な学習活動
「中国を知ろう」	10月下旬～11月上旬 全5時間	<ul style="list-style-type: none"> ・中国の位置、国旗、言葉、食べ物、動物などを知る。 ・日本と中国の文化を比べながら、感じたことや気付いたことを身振りや言葉などで表現する。
「中国と交流しよう」	11月上旬～11月中旬 全7時間 <オンライン交流>	<ul style="list-style-type: none"> ・「好きな物クイズ」で使用する物を製作する。 ・クイズの出題や解答の練習を通して、オンライン上で相手を意識し、話を聞いたり伝えたりする。 ・好きな物に関するシルエットクイズを出す。 ・相手校の児童が描いたシルエットを見て、好きな物を当てる。 ・ダンスを一緒に踊る。
「中国を伝えよう」	11月中旬～12月上旬 全6時間	<ul style="list-style-type: none"> ・中国について学んだことや交流した体験を、低学年の児童に伝える。



「中国を知ろう」の学習で調べた内容の発表や作成した掲示



クイズで使用する物品を作成する様子

クイズの出題や解答の練習



オンライン交流当日の流れ（左）と児童同士が挨拶する様子



相手が正解するまで、様々な身振りで表現しながらヒントを出す児童

4. 今後の国際交流に向けて

本校では、海外からの研修・視察の受け入れを段階的に再開し、令和7年度はJICA研修をはじめ、複数の国・地域からの見学を受け入れることができた。今後も、こうした受け入れ型研修を継続し、本校の自閉症教育の実践について、講義・授業参観・意見交換を組み合わせた研修視察プログラムのさらなる充実を図っていきたい。また、海外からの来校者と幼児児童が、日常の活動を通して自然に同じ時間と空間を共有する経験は、幼児児童が海外や海外の人々に親しみをもつ貴重な機会となっており、今後も教育活動の一環として大切にしていきたい。

加えて、姉妹校である中国達敏学校とのオンライン交流については、教師間の交流にとどまらず、小学部児童同士の交流を教育課程上に明確に位置付け、取組を継続していく。オンラインという特性を踏まえ、視覚的な教材の工夫や活動内容の精選、教師の関わり方を検討することで、児童が安心して参加し、「伝わる」「分かり合える」経験を積み重ねられる交流の在り方を追究していきたい。こうした取組は、幼児児童の表現意欲や主体性を育てるとともに、国際教育を単発的な行事ではなく、学びの連続性の中で捉える視点を学校全体で共有することにつながっている。

さらに、オンライン研修や訪問コンサルテーションを通じた海外への専門的支援についても、相手校の実態やニーズに応じた支援の在り方を検討していく必要がある。これらの国際交流の取組は、本校の教育実践を国際的に発信する機会であると同時に、教師が自校の取組を振り返り、専門性を高める学びの場としても重要な意義をもっている。

今後は、受け入れ型研修、オンライン交流、専門的支援を関連付けながら、幼児児童にとっても教師にとっても意義のある国際教育の充実を図り、本校の教育の質の向上につなげていきたい。

4. 各附属学校のイングリッシュルーム活動

附属小学校

附属小学校 イングリッシュルームの活用報告

1. 活動報告 Tsukuba English Cafe

ALT 教員と連携し、校内にイングリッシュルーム「Tsukuba English Cafe」を開設し、中休み・昼休み・放課後の時間帯に、1年生から6年生までの希望者を対象として交流活動を実施した。各回の参加人数は、低・中・高学年それぞれ15～25名程度であり、学年に応じた活動を通して、児童が英語に親しみながらALTと楽しく関わる姿が多く見られた。

Tsukuba English Cafeでは、ゲームや簡単な会話活動を中心に、英語を「学ぶ」だけでなく「使って楽しむ」ことを大切にしている。その結果、英語への心理的な抵抗感が軽減され、授業以外の場面でも英語に触れようとする児童の姿が増えた。また、学年を越えた交流が自然に生まれ、英語を媒介として異学年同士がつながる貴重な機会となった点も大きな成果である。

さらに、Tsukuba English Cafeを継続的に実施したことで、全学年の児童がALTのリリー先生と積極的に関わるようになり、英語に触れる機会の増加だけでなく、出身国であるフィリピンの文化や生活について話を聞く機会も広がった。こうした交流を通して、児童の国際理解や異文化への関心が高まったことも、本取組の意義の一つである。

本年度オーストラリア研修に参加予定の児童を対象とした事前研修の場としてもTsukuba English Cafeを活用し、英語での自己紹介や簡単なやりとりを練習する時間を設けている。英語による自己表現にまだ十分慣れていない児童もいる中で、研修を見据え、実際に英語を使いながら伝える経験を積むことができている。授業時間外のリラックスした雰囲気の中で行われたことで、児童が安心して挑戦できる学習の場となり、英語でのやりとりに対する自信の育成にもつながっている。



2. 児童生徒の感想

2年：リリー先生や他の学年の人とゲームをするのが楽しいです。

3年：いろいろおしゃべりできて楽しいです。

4年：オーストラリア研修に向けての準備をすることができてよいです。

5年：Tsukuba English Cafeに来るといろんな学年の人と英語で話すのが楽しいです。

6年：少人数で話すことができるのがいいです。フィリピンやいろいろな国のことについて知ることができて楽しいです。

附属中学校 イングリッシュルームの活用報告

1. 活動報告

基本的には例年通り実施

- ・前期は週1回（水曜日）、後期は週2回（火・水曜日）、放課後に開設する。
- ・開室中は通常授業の Team-teaching の ALT が常駐する。
- ・利用時間は1枠15分交代、利用人数は1枠2名までを原則とする。
- ・生徒は部屋の扉にある表に名前を記入して予約する。
- ・アメリカ短期留学プログラム・国際交流プログラム参加生徒は積極的に活用するように呼びかける。
- ・来室した生徒を毎週記録しておく。
- ・1年生の利用は後期からとする。
- ・アメリカ短期留学プログラムの写真や参加者レポート、その他国際関係のチラシやポスターを部屋の外に展示している。
- ・多読用の本を準備し、待ち時間に読めるようにしている。

今年度も多くの生徒が利用した。特にアメリカ短期留学プログラムや国際交流プログラムに参加する生徒たちが意欲的に来室し、英語力を伸ばそうと懸命に努力した。頻繁に来室する生徒の中には、全国中学校英語弁論大会（高円宮杯）に挑戦する者も出てくるなど、生徒たちの向上心に良い刺激を与えているようである。

後期からは1年生の参加も増え、授業での発表活動の練習やライティングの添削に訪れる生徒もあり、利用できる枠を拡大してほしいという声も多く聞かれた。

2. 生徒の感想

- ・話している中でたくさん間違えてしまいましたが、それよりも英語で日常会話ができたという驚きと喜びが勝りました。勇気を出して行って良かったです。
- ・初めて行くときはなかなか勇気が出なかった。しかし、仲が良い友達となら、と思い切って行ってみると、想像以上に英語を話すことの楽しさを感じることができた。自分の英語が先生に通じることがとてもうれしく、自分の英語力をあげたいと思うきっかけになった。
- ・English Room で直接 ALT の先生と英語で会話をする中で、その場で言いたいことを言う力を伸ばすことができました。もちろん、単語や表現がうまく出てこないことも多いですが、多少時間がかかっても、伝えようとする中で、知っている単語を使って工夫したり、言い換えたりする力が身についたと感じています。また、毎回違うトピックについて話すのですが、その度に先生の趣味や外国の文化にも触れることができ、大変興味深く、面白かったです。英語は外国の人とつながるためのツールであり、実際に会話を通して文化や考え方を知ることができる点に、英語を学ぶ楽しさがあると感じました。



附属高等学校のイングリッシュルーム活動について

1. 活動報告

① Rod MacRae 先生（附属中学校のイングリッシュルームも担当）による英語指導

各国際交流プログラムに参加する生徒に対しての研修を、前期の木曜日・金曜日の放課後に実施した（各曜日 120 分×3回）。また、希望する生徒に対しての個人または少人数指導（英会話・スピーチ・面接・英作文等）を、前期および後期の木曜日・金曜日の放課後に行った（1コマ 20 分）。

さらに、例年通り、スタンフォード大学が提供するオンライン授業（Stanford e-Japan）への参加希望者にも指導を行った。Stanford e-Japan に出願する際には志望動機等の英文エッセイが求められるため、メールを通じて、希望する生徒の英文添削を行った。

② Robert Juppe 先生（本校 ALT）による英語指導

火曜日の昼休みに、本校の英字新聞部の活動に参加した。英字新聞は5回発行された。英語による日常会話・ディスカッション・ディベート等の指導を担当した。

今年度「イングリッシュルーム」を活用した生徒の目的をまとめると、以下のようになる。

- ・国際交流事業への参加が決定した生徒の準備（1, 2年生）
- ・大学入試に向けた英語のエッセイの添削, および英語面接の練習（1～3年生）
- ・「論理・表現 I」の授業で行うスピーチ原稿の添削とスピーチ練習（1年生）
- ・英語の運用能力を伸ばすため（1～3年生）
- ・MacRae 先生および Juppe 先生と英会話（1～2年生）
- ・総合的な探究の時間（筑波スタディ）で行っている研究についての助言（1～2年生）

*①②の利用者数は、2026年1月現在延べ100名程度

2. 生徒の感想

以下は、今年度の「イングリッシュルーム」参加者によるコメントの一部である。（原文ママ）

- ・私はボブ先生とのランチタイムに行っていたのですが、楽しみながら英語で会話できました。会話能力の向上や、英語で会話することへの苦手意識の改善に繋がりました。
- ・マクレイ先生と1対1の環境なので、間違いを気にせずとにかくお話しできることに楽しさを見出しています。初めは、正しい文法を使おうと必死になった結果自分から話せず、ほとんど聞いているだけでした。最近は文法の正確さよりも、話を広げることやどんな形でも自分の意見を伝えることを意識しています。相互のやり取りが増えてきて、少しずつでも成長できているのかなと思っています。これからも毎週通いたいです。
- ・Stanford e-Japan の応募のためのエッセイの添削をしていただきました。日本に住んでいるとなかなか知り得ない現地での言い回しやフォーマルな言葉遣いを教えていただくことができ、とてもためになり、貴重な機会でした。



3. 今後へ向けて

今年度も海外研修の事前研修としてイングリッシュルーム活動を十分に活用することができたと考えている。また、本校には英語のアウトプットスキルを伸ばしたいと考えるモチベーションの高い生徒が多く、そのような生徒にとっても「イングリッシュルーム」は欠かせない存在である。経験豊富なネイティブスピーカーの先生から生徒一人ひとりの要望に合わせた指導を受けられる貴重な機会なので、より多くの生徒が英語運用能力を高められるよう、積極的に周知するなどして、活動をさらに活発なものにしていきたい。

English Room 実践報告

1. 活動報告

本校の English Room 活動は、生徒の実践的な英語運用能力育成を目的とし、様々な支援を提供している。

放課後に本校 ALT による指導の他、中3 テーマ学習・高2 課題研究といった生徒の探究学習における講師や発表への指導助言、釜山国際高校に派遣される生徒と台中一中との研究交流で発表する生徒の原稿作成・プレゼン指導などを実施している。

特に海外派遣研修で発表する生徒については英語プレゼンテーション指導の専門家である Mr. Gary Vierheller と Mrs. Sachiyo Vierheller に継続してご指導いただいている。生徒はちょっとした声音の変化や身体の使い方によって、「伝わり方」が劇的に変化することを身をもって学んでいる。



また、ディベートの分野で活躍する卒業生に講師を務めてもらい、語学部のディベートチームへのトレーニングにも引き続き注力している。その結果、日本高校生パラメンタリーディベート連盟 (HPDU) 主催の即興型英語ディベート全国大会においては毎年のように優秀な戦績をおさめているほか、授業でも実施可能な PDA 形式の大会での優勝を含む上位入賞・世界交流大会出場、さらには高校生の世界大会 (World Schools Debating Championship) の日本代表チームの選手として選抜される等の好成績をおさめる生徒も増えてきている。

今年度は、釜山国際高校へ派遣が決まった生徒に対して英語でディスカッションをするための研修を実施した他、中3 テーマ学習では、東京大学グローバル教育センターから、専門的な発表指導ができる講師をアドバイザーとして招いた。

引き続き、より多くの生徒たちにこのプログラムの効果が還元できるような実施形態を模索し、本校生徒の特性を活かしつつ、英会話にとどまらない高度な英語運用能力の育成を目指した実践を続けた。

2. 生徒の感想



- ・英語をこんなにちゃんと話したことがなかったので、話せるという自信になった。
- ・講師の人が丁寧で分かりやすく話してくれたので、気負わずに受けられてよかった。
- ・失敗するプレッシャーがなくとても楽しかった。
- ・やっぱり海外の人と交流を持つことは自分の将来の可能性を広げるのに有効だと思った。
- ・英語を話す機会がなかなかない中で、その機会を得ることができたのに加えて、難易度も自分にちょうどよいものだった。

・3時間英語を使ってコミュニケーションを取るのはとても難しかったが、集中して周りの話を聞き、自分の意見を伝えたのはいい経験になったと思う。

- ・英語を話す経験があまりなかったが、思ったより話せて自信がついた。
- ・英語を話してディスカッションをするという貴重な経験ができた。

生徒主体で広がる国際交流と英語活動の実践報告

1. 活動報告

イングリッシュルームの活動は、英語を使う場を日常的に確保しつつ、国際理解を深める機会を広げることを目的として年間を通じて実施した。中心となる取り組みは二つあり、ひとつは週1回の昼休みにALTが常駐するオープンスペースとしての活動、もう一つは秋休みに行った国際理解デイキャンプである。これらの活動は、生徒の英語学習意欲の向上だけでなく、異文化交流や地域連携の促進にも大きく寄与した。

昼休みのイングリッシュルームでは、ALTと自由に会話できる環境を整え、生徒が気軽に英語に触れられる時間を提供した。授業の予習・復習に活用する生徒、英検や入試対策として個別に質問する生徒、ボードゲームを通して自然なコミュニケーションを楽しむ生徒など、利用目的は多様であった。「毎週そこに行けば必ずALTがいる」という安心感が生徒の継続的な参加につながり、英語を使うことへの心理的ハードルを下げる効果が見られた。また、学年や英語力を問わず参加できるため、異なる背景を持つ生徒同士の交流の場としても機能した。

もう一つの柱である国際理解デイキャンプは、英語を使う実践的な場を広げるとともに、多文化共生への理解を深めることを目的として実施した。女子栄養大学や城西大学から中国・タイ・インドネシア・フィリピン出身の留学生を招き、各国の文化を紹介するブースを設けてもらった。中国茶を淹れってもらう体験や、各国の食文化をテーマにしたビンゴゲームなど、生徒が楽しみながら異文化に触れられる工夫が多く盛り込まれた。また、外国にルーツを持つ本校生徒も家庭での文化を紹介し合い、互いの背景を尊重しながら学び合う姿が見られたことは大きな成果である。さらに、今年度は生徒の国際交流委員会が主体的に企画・運営に関わり、生徒の自主性と協働性が育まれた点も特筆すべきである。

地域との連携も強化し、ウクライナ難民支援に携わる地域の方を招いて工作ワークショップを行った。秋のデイキャンプが好評だったことを受け、クリスマスツリーづくりの活動も追加で実施した。学校で収穫した稲を材料として用いたことで、授業内容とも関連づけた学びとなり、国際理解・平和学習・地域交流が有機的につながる取り組みとなった。

これらの活動を通じて、生徒は英語を使う楽しさを実感し、異文化への理解を深めることができた。今後は広報を強化し、より多くの生徒が参加できるよう環境を整えるとともに、大学や地域との連携を継続し、年間を通じた国際交流の機会をさらに充実させていきたい。

2. 生徒の感想

(デイキャンプにおいて英語で何を話したか聞かれて)「初対面の学生さんとの共通点を知って打ち解けることができた。」

(2年生)「ウクライナのバッグづくりで鳥の模様は何の意味があるのか尋ねた。」(1年生)



イングリッシュルームでの経験を実践へ

1. 活動報告

【中学部】

1 回目は中学部生徒全員を対象に「異文化経験」をテーマにカナダ出身の講師と交流した。前半は、日本に長く居住している講師の来日後の経験を話していただき、後半は生徒からの質問タイムを設けた。生徒からはオーソドックスな質問から、ALT として勤務経験のある講師へ「日本人はどうしたらもっと英語を話せるようになると思いますか」といった質問も出て充実した交流を行うことができた。

2 回目以降は昨年度にも来校されたルーマニア出身の講師と学年別に実施した。2、3 年生は昨年度からの引き続きの交流であったため、ルーマニアと日本の学校生活や価値観などの共通性や相違性について話し合うことができた。

中学部では ALT との学習を踏まえ、他国に興味を持ち実際に言葉を交わすことで、身近に感じ、考える良いきっかけとなる活動を今後も継続していく。

【高等部】

高等部では、6 月から 3 月にかけて、イングリッシュルームを計 28 回実施した。講師は昨年度と同様、ニュージーランド出身のネイティブスピーカーに依頼した。活動はオンラインによる 1 対 1 形式で行い、クラス人数に応じて 1 人あたり 6～15 分の時間を確保した。運営にあたってはクラスを 2 つのグループに分け、月曜日を高 1・高 2、金曜日を高 3 の実施日とした。

2. 生徒の感想

【中学部】

- ・英語がとても聞き取りやすく、ゆっくり話してくれたため、聞き取ることへの自信になった。「英語は言葉だから、どんどん使うことで成功体験を積み重ねよう」という言葉が印象的
- ・日本の音楽やアニメ、漫画の話ができてうれしかった。
- ・自分を大切にすることなど、道徳的な話も興味深かった。

【高等部】

- ・イングリッシュルームを通して、英語力やコミュニケーション能力を高めることができました。日本語が通じない相手との会話を重ねる中で、相手の国の文化や、自分の考えをどのように伝えるかを学ぶことができました。イングリッシュルームでの経験を通じて、実際に旅行に行った際にも多くの方と会話を楽しめるようになりました。普段の授業では得られない実践的な学びによって、英語力を大きく伸ばすことができましたと感じています。ありがとうございました。
- ・私自身まだまだ拙い英語ではありますが、これから社会に出ていく中で、さまざまな人種・国籍の方とお話ししたいという思いがあります。この経験を通して、今後も多くの方と英語で交流してみたいと感じるようになりました。(写真は中学部 1, 2 回目の様子)



英語、国際手話に触れて、世界が身近に！

1. 活動報告

本校の児童生徒は、音声に加え非言語情報（話し手の表情や口の動き）、視覚情報（文字、絵等）など様々な情報から話の内容を理解しコミュニケーションを行う。そのため、イングリッシュルームにおいても音声認識ソフトや文字情報を提示して英語によるコミュニケーションを楽しむ工夫をしている。今年度は、国際手話に触れる時間も設け、生徒の海外への関心がさらに高まった。

イングリッシュルームの取組

学部	回数	内容・成果	
小学部	1・2年：各学級1回 3・4年：各学級2回 5・6年：各学級3回 計12回	1、2年生では、講師の故郷の町並みやクリスマスの写真を見ながら話を聞いた。児童は、「What is it?」「It's a Christmas tree.」など写真に写っているものの名前についてのやり取りを楽しんだ。 3、4年生では、講師と一緒に「アルファベットのダンス」「英語での動物の鳴き声クイズ」など、体を動かしながら英語を使ったダンスやクイズを楽しんだ。 5、6年生では、英語を使って好きな本や行事の紹介をした。絵やタブレットも使って、本の内容を絵や体の動きで表現したり、タブレットで写真と文と一緒に見せあったりするなどして工夫して活動した。	
中学部	各学年2回 計12回	通常授業で学習した語彙や文法を実際の対話の中で活用できるよう、講師による工夫がなされている。昼休みという短い時間であるものの、他学級の生徒も参加するなど、英会話への親しみを高める機会となっている。	
高等部	普通科	5回	昼休みに希望者が参加し、Microsoft Teams のチャットやロイロノート・スクールのカード、iPad のメモアプリを用いて講師と生徒がやり取りをした。今年度の活動では、日本と海外におけるコミュニケーションや交流方法の違い、好きなゲーム、AI の活用方法などが話題となった。文法事項の疑問に対して、講師から例文を教えてもらい、生徒なりのことばにして理解を深めることができた。
	専攻科	1年生 計6回	今年度は、専攻科1年生3名がイングリッシュルームに参加した。筆談パッドやUDトークを用いて互いに自己紹介を行い、打ち解けた後は、講師の出身地であるアメリカの文化やカンボジアに旅をした話を聞くなど、毎回様々なトピックスで話をした。講師のジョークを交えた会話に、生徒は毎回大変楽しんでいる様子がみられた。最終回には感謝を込めて生徒一人一人から似顔絵をプレゼントした。



小学部イングリッシュルーム



高等部普通科イングリッシュルーム

2. 高等部普通科における国際手話の取組の成果と課題

(1) 国際手話の実践

高等部普通科では、学年ごとに2回ずつ国際手話に触れる機会を設けた。筑波技術大学における国際手話通訳に関する指導や、東京2025デフリンピックに向けた国際手話通訳研修会を担当し、さらに同大会で国際手話通訳を務めた小林洋子氏を講師として招聘した。

第1回の内容は、国際手話の概要、使用場面、指文字、指文字クイズ、基本会話（あいさつ）、疑問文、自己紹介のペア活動（名前、サインネーム、出身国）、参考になるサイトや書籍の紹介であった。第2回の内容は、国際手話の豆知識（背景、英文法との違い、国際手話を使って交流できる場所など）、第1回の授業の復習（指文字、あいさつ、疑問文）、数字とお金の表現、買い物場面のペア活動であった。買い物場面のペア活動では、店員と客の役になり、商品の値段を聞いて答え、その値段に応じて反応することがポイントとして示された。

(2) アンケート調査結果

1～3年生の生徒に対し、終了後にMicrosoft Formsを使用した選択式及び記述式の電子アンケート調査を実施した。第1回は65名、第2回は39名の生徒から回答が得られた。

① 日本の手話以外の学習経験

日本の手話以外の手話の学習経験があると回答したのは55%、ないと回答したのは45%であった。学習経験のある手話は、アメリカ手話（以下、ASL）の指文字が31名、簡単な挨拶が28名、自己紹介程度22名、国際手話（指文字）20名、フランス手話（以下、LSF）や国際手話の簡単な挨拶および自己紹介程度が10名、LSF（指文字）7名、ASL（日常会話程度）とLSF（自己紹介程度）が5名、国際手話（日常会話程度）2名、その他2名であった。これまでに日本の手話以外の手話を学んだ場面について、小学校や中学校、英語の教師、友人、フランス国立パリ聾学校（以下、「パリ聾学校」という。）との交流、世界大会等での交流、家庭学習や塾等、自主的にメディア（映画、ニュース、YouTube）で学んだという回答が得られた。

② パリ聾学校交流でのコミュニケーションの状況

日本の手話23%や英語（筆記）20%と生徒が慣れ親しんだコミュニケーションを用いる割合が高かったが、ASL15%、国際手話10%、LSF8%と海外の手話も30%程度活用しているようであった。続いて、日本語（音声）8%、日本語（筆記）5%、英語（音声）とフランス語（筆記）4%、その他3%であった。

③ 国際手話への興味関心

国際手話を習う前に国際手話に興味関心があったと回答したのは58%、なかったと回答したのは42%であった。興味関心があった生徒の国際手話を学習したい理由について、海外の人々とコミュニケーションをとるための最多で55%、興味関心が24%、デフリンピックに関連した内容が10%、視野を広げるためという内容が8%、その他3%であった。

④ 海外の手話やコミュニケーションへの態度

第2回終了後、海外の手話やコミュニケーションへの態度について尋ねた項目で「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した生徒は、「もっと国際手話を学びたい」「国際手話を身に付ければ、海外でもコミュニケーションをとることができると思う」という項目で80%以上、「海外のろう者と関わりたい」「国際手話を使ってコミュニケーションをとれるようになりたい」「外国の手話（国際手話以外）を学びたい」という項目で70%以上を占めた。

⑤ 国際手話の習得状況

国際手話の習得状況については、授業内容を踏まえ、受容および表出について項目を作成した。第2回終了後、「授業を受ける前からできていた」「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した生徒は、

「簡単な挨拶を理解することができる」「簡単なやり取りを理解することができる」「自分の名前を指文字で表すことができる」「簡単な挨拶をすることができる」という項目で90%以上、「指文字を読み取ることができる」「全ての指文字を表すことができる」「自己紹介をすることができる」「簡単な質問をすることができる」「簡単な質問に答えることができる」「簡単なやり取りをすることができる」という項目で80%前後を占めた。

(3) 国際手話に関する感想

① 自己紹介や買い物場面のペア活動

表情の大切さやジェスチャーの活用、手話表現に関する学び、国際手話を通じるよさ、日本の手話やASLとの表現方法の違いによる難しさ、読み取りや表現の難しさについての意見がみられた。

② 国際手話から学んだこと

日本の手話やASLとの類似点や相違点、表情の大切さ、国際手話の概要、地域による違い、英語との関連性、ジェスチャーの活用、その他表現に関する事項についての学び、世界のろう者となることができるという肯定的な内容があった。また、学習やコミュニケーションへの意欲を示したり、楽しい・面白いと感じたりした生徒がいた一方で、難しさを感じた生徒もいた。

③ どのように生かしていきたいか

海外の人々に会った時、海外に行った時、デフリンピックや国際試合など、海外のろう者とのコミュニケーションで生かしたいという意見が多くみられた。

④ 今後学習したい内容

日常会話や日本の手話と似ている手話・異なる手話、観光案内などの手話表現、生徒同士、海外のろう者、海外の聾学校との交流で実際にやり取りをしたいという意見や、クイズ・ゲーム形式で学びたいという意見もみられた。

(4) まとめ

今回の取組により、国際手話の指文字、簡単な挨拶、簡単な質問と応答はできるという実感をもつことができた生徒が多いのではないかと見える。終了後、簡単な質問や応答について肯定的な評価をした生徒が多かった。パリ聾学校との交流でも、日本の手話や英語を活用しつつ、ASLやLSF、国際手話を使用した経験のある生徒がいた。実際に活用する機会があると、国際手話の学習意欲や必要性が高まるのではないかと考える。今後も国際手話授業や交流等を通して、さらに学習や実践を重ねることで、生徒が自信をもって国際手話を用いてコミュニケーションを図ることができるようになるのではないかと考える。



ではないかと考える。

今後の課題として、会話形式の実践に参加しやすくなるように十分な活動時間を確保し、クイズ・ゲーム形式の活動、実際に国際手話を用いて会話する様子を見てやり取りの内容を考える活動、手話表現に対する気づきを共有する活動なども取り入れながら、学びを深めていけるとよいと考える。

(文責：榎戸里佳、澤口真弓、水野尾哲也、宮本亜希子)

附属大塚特別支援学校のイングリッシュルーム活動

活動報告：ALT（Assistant Language Teacher）による外国語（英語）学習

本校では今年度も長年担当をしていただいている先生のご指導の下、幼稚部と小学部、高等部においては、各学級4回程度の授業をそれぞれ実施した。中学部においては、学級毎ではなく3学級全員での授業を行うようにし、計14回実施をした。

今年度も、年度初めのALTとの打ち合わせから始めた。大まかな幼児児童生徒の実態を共有し、年間の指導計画の作成を行った。また、各日30分程度、ALTと実施後授業について話し合ったり、次回の計画を見直したりする時間を設け、子どもの実態に合う指導内容について意見交換を行った。題材によっては、長期間に渡って繰り返し学習をすることで、学習の定着を図ることが可能となる（例：天気については幼稚部から高等部まで取り扱い、挨拶については、小学部から高等部まで取り扱い、日付については、中学部から高等部まで取り扱う等）。また一方で、今年度においても、生活年齢に応じた指導の在り方を配慮した授業を実践していただいた。以下のように、今年度の各学部におけるイングリッシュルームの実践について、生活年齢に応じた指導・支援の工夫に焦点をあてて報告する。

（1）幼稚部におけるイングリッシュルームの実際

幼稚部においては、現在4名の幼児が在籍しているが、発語が少なく言語のみでのコミュニケーションが難しい幼児が少なくない。このような実態の幼児から積極的に授業に参加する姿を見出すには、動画教材の使用がとても有効である。英語の歌詞を聞いて英語の音に親しむ目的のものから、ジェスチャーやダンスのある曲で、身体表現を用いて英語のリズムに親しむ目的のものまで、30分間にのべ7曲もの曲を用いて、全員の興味・関心を引き出す工夫がなされていた。最初から最後まで注目できる幼児もいるが、それぞれの興味に合った曲に反応を示すという幼児がほとんどである。それぞれにお気に入りの一曲ができることで、初めは馴染みのない英語に親しむことが可能となる。授業が終わってお別れの時には「Bye!」という声やハイタッチする手に笑顔で反応する姿が見られたのは、きっと授業の楽しさの余韻からくるものであろうと感じた。実際に使用されていた動画教材は、“Head Shoulders Knees & Toes”“One Little Finger”“Hello Song”“One Potato, Two Potatoes”“Peekaboo”“If You’re Happy And You Know It”他である。



複数の動画教材（英語の歌）を活用している



“Peekaboo”で、この笑顔！

（2）小学部におけるイングリッシュルームの実際

小学部には、24名の児童が在籍している。1学級8名の3学級を編成し、イングリッシュルームも学級毎に行っている。歌等の動画教材を多く用いる低学年の学級から、中学年、高学年と生活年齢が上がるにつれ、言語によるやりとり（挨拶や体調、Yes/Noで答える簡単な質問等）を取り入れたり、色や動物、食べ物等の多くの英単語にふれる活動を取り入れたりとしている。

特に高学年の授業では、英語に触れること自体を目的とする段階から、繰り返し学習を通して英語表現の定着を図ることをねらいとしている。本授業における「繰り返し学習」は、同一の教材を用いて反復するものではなく、複数の教材を活用しながら段階的に学習内容を深める形で行われていた。例えば、「色」を題材とした授業では、①色カードを提示し、日本語による補足を交えながら英語での発音を確認する。②色を題材とした動画教材を用いて児童の興味・関心を高め、生活の中に存在する色に意識を向けさせながら発音練習をする。③教室内にある動画に登場した色の物を探し、教師に伝える活動を通して、実際の生活場面と結び付けた発音練習をする。

このように、同一教材の反復にとどまらず、複数の教材を用いて段階的に学習を進めることで、児童が「色」に関する英語表現をより確実に理解・定着できるよう工夫されていた。授業開始時には日本語のみで発話していた児童が、45分間の授業の終盤には英語を用いて発話する姿が見られ、繰り返し学習による効果が確認された。



カードや動画教材を通して、繰り返し色の表現にふれる



教室内で色を探す活動

(3) 中学部、高等部におけるイングリッシュルームの実際

中学部には、17名の生徒が在籍している。ALTによる授業は、今年度は年度初めから3学級一斉での授業の形態で行った。この他に、週1回、2グループに分けて行う外国語（英語）を位置付けている。また、高等部には、19名の生徒が在籍している。ALTによる授業は学級毎に行い、中学部と同じく、週1回外国語（英語）も学級毎に実施している。そして、幼稚部や小学部とは異なり、中学部と高等部におけるALTの授業は、共通する教材を用いて6年間の指導を行っている。何度も繰り返し取り組む学習内容では、自信をもって表出しようとする生徒の姿が多く見られる。また、今年度は、理解が深まっている生徒がいるということで、“I like ~.”だけでなく、より丁寧な表現である“I’d like ~.”や、アルファベットの表記とそれぞれの発音の違いを新たに取り入れた。細かな表現や発音の違いを理解することは難しいという理由で取り扱わないのではなく、実態差のある集団であるからこそ、生徒の実態に合わせた目標を設定したうえで、導入の時期を検討しながら積極的に新規課題を取り入れることは、生徒の興味関心を持続させる工夫であると感じた。



中学部は3学年での一斉授業



発音のしやすい口の形を伝えている

(文責 菅野佳江)

新たな参加者の獲得を目指したいイングリッシュルーム

1. 活動報告

今年度のイングリッシュルームも、ALT を勤める非常勤講師の出勤日である木曜日、金曜日を中心に開催した。実施回数は、小学部では、1学期10、2学期29、夏季10、3学期10時間（見込み）であった。中・高等部では、1学期6、2学期13、夏季15、3学期5時間（見込み）であった。小学部は対象学年を日によって2学年ごとや3学年ごとに区切ったため、実施回数が多くなった。中・高等部では、同好会や部活動の予定と重なる日程を避けたため、夏期休業中の開催が多くなった。

小学部では、恒例のハロウィンパーティーやクリスマス会といったイベントを実施し、盛況であった。（写真1）また、今年度初めて小学部、中・高等部ともに全学年対象の日を”Game Day”と設定した。（写真2）中・高等部では”neu”や”TACO CAT GOAT CHEESE PIZZA”といった、ルールがシンプルで盛り上がるゲームが好評だった。初めてプレイする人に英語でルールを説明しようとして、”Oh, no!”などと反応したりして、楽しみながら英語を使う様子が見られた。



（写真1）



（写真2）

2. 児童生徒の感想

児童生徒に1月7日に配付したアンケート（5件法と自由記述）より、感想を抜粋する。

- ・質問5「イングリッシュルームは楽しいですか？」

回答（小6） 5（とてもそう思う）「みんなと面白いゲームが楽しかったです」

- ・質問6「イングリッシュルームでは役に立つことが学べますか？」

回答（小3） 5（とてもそう思う）「前にイングリッシュルームで学んだことをこまった人にえいごでおしえてあげました」

回答（中2） 1（全くそう思わない）「カードゲームしかやっていないから」

- ・質問7「イングリッシュルームに参加して自分は変わりましたか？」

回答（小3） 5（とてもそう思う）「もっと英語が好きになった」

回答（中2） 2（そう思わない）「英語で話すことが緊張する」

参加者のほとんどが「楽しい」「役に立つ」と回答しているが、今年度の参加率は小学部、中・高等部ともおおむね半々であった。「参加しなかった理由」としては「定期的な通院」「習い事」「送迎の都合」が多かった。これらは曜日によるところが大きいため、現在参加できない者が今後参加できるようになる可能性は高くない。一方、今年度は当初の計画より日ごとの対象を広げたところ、一定の効果はあったように思われる。次年度も、新たな参加者の獲得を目指したい。

5. おわりに

2025 年度の本学附属学校の国際教育を振り返って

附属学校国際教育推進委員会 委員長 篠塚明彦

2025 年度は、コロナ禍後に各附属学校において再開された対面による国際交流の一層の拡充や発展がみられた。また、コロナ禍を契機として広がったオンラインを活用した交流のほか、教員研修や留学生の受け入れによる交流の実施など様々な形で、各附属学校それぞれの特色を生かした国際交流の取組が行われた。このほか、コロナ禍の影響などもあって一時的に途切れていた海外の学校との国際交流協定の再締結が駒場高等学校と桐が丘特別支援学校でなされるなど、交流の拡充が着実に進んでいる。

本報告書に記載されている交流先の国・地域名を列举すると、アジア〔アフガニスタン・イスラム共和国、インド共和国、インドネシア共和国、カザフスタン共和国、大韓民国、シンガポール共和国、スリランカ民主社会主義共和国、タイ王国、中華人民共和国、パキスタン・イスラム共和国、フィリピン共和国、マレーシア、モンゴル国、(地域) 台湾、(地域) 香港〕、ヨーロッパ〔英国 (グレートブリテン及び北アイルランド連合王国)、スイス連邦、デンマーク王国、フランス共和国、ルーマニア〕、南北アメリカ〔アメリカ合衆国、アルゼンチン共和国、ウルグアイ東方共和国、カナダ、キューバ共和国、ブラジル連邦共和国、ベリーズ、ペルー共和国〕、オセアニア〔オーストラリア連邦、ニュージーランド〕、アフリカ〔ジンバブエ共和国、セネガル共和国、タンザニア連合共和国、ナイジェリア連邦共和国、マラウイ共和国、モザンビーク共和国〕の全 36 개국・地域におよぶ。(※本数値は、国際交流協定先および派遣・受入先に加え、留学生の出身国ならびに出身国を明示した講師との人的交流を含めて整理したものである。)

今年度は学校主催の海外交流・研修が、附属小学校、中学校、高等学校、駒場高等学校、坂戸高等学校、聴覚特別支援学校に加え、桐が丘特別支援学校でも実施された。各国との交流の形態は様々であり、各附属学校の特色や児童・生徒の特性も踏まえつつ、多彩な交流プログラムも実施されるなど、多様な形で国際交流の在り方をお示しすることができたと考えている。活動の詳細については、各校の報告のページをご覧ください。

以上のように各附属学校における国際教育は、コロナ禍での経験やそこで生み出された工夫を活かして、以前にも増して充実した実践を進めている。これらの活動について、引き続き国際教育推進委員会の場を活用しながら附属学校間における情報共有を図ったほか、今年度はFDミニセミナーの場も活用し、国際教育推進委員会の委員のみならず、広く附属学校の教員が各校の国際交流について情報共有できる試みにも取り組んだ。

国立大学法人の附属学校は、平和や人権、エネルギー・環境問題をはじめとする、地球的規模の課題に立ち向かう次世代のグローバル人材の育成に向けて、新たな教育課程や実践プログラムを開発するミッションを担っている。そこでは、生活環境や文化の異なる海外の人々と協働して国際的な課題の解決に取り組み、その過程においてリーダーシップおよびフォロワーシップを発揮できる人材の育成が求められている。先にも述べたような多様な取り組みを広く示していくことがこうしたミッションに答えることにつながるであろう。引き続き、附属学校がその特性を活かしながら先導的な教育活動を実践するとともに、筑波大学の国際展開力を活用した高大連携による国際教育活動をさらに推進し、地球的規模の課題にも地域的課題にも貢献できる人材の育成を目指していきたい。

6. 資料編

(1) 附属学校の国際交流協定締結状況

学校名	国・地域名	相手先機関名	当初締結日 現協定有効期間	交流の分野
附属駒場高等学校	台湾	台中市立台中第一高級中等学校 Taichung Municipal Taichung First Senior High School	2015.12.11 2026.2.1 ～2031.1.31	生徒間の学習活動の交流
附属坂戸高等学校	インドネシア共和国	IPB 大学附属コルニタ高等学校 Kornita Senior High School, IPB University	2010.12.1 2023.2.10 ～2028.2.9	国際教育・ESD における生徒・ 教員の交流
	インドネシア共和国	環境林業省林業教育研修センター Center for Forestry Education and Training, Ministry of Environment and Forestry	2013.3.19 2024.3.6 ～2027.3.5	国際教育・ESD における生徒・ 教員の交流
	タイ王国	カセサート大学附属高等学校 Kasetsart University Laboratory School	2017.11.9 2023.2.10 ～2028.2.9	国際教育・ESD における生徒・ 教員の交流
	インドネシア共和国	インドネシア教育大学附属高等学校 Indonesia University of Education Laboratory High School	2023.8.7 2023.8.7 ～2028.8.6	国際教育・ESD における生徒・ 教員の交流
	マレーシア	クアラルンプール日本人学校 The Japanese School of Kuala Lumpur	2024.10.1 2024.10.1 ～2027.9.30	国際教育・ESD における生徒・ 教員の交流
	インドネシア共和国	パクアン大学 Pakuan University	2025.2.22 2025.2.22 ～2030.2.21	国際教育・ESD における生徒・ 教員の交流
附属視覚特別支援学校	タイ王国	タイ視覚障害者支援慈善財団 The Charity Foundation for the Blind in Thailand	2020.1.13 2025.1.13 ～2030.1.12	短期留学を含めた生徒間の学習活動の交流、視覚障害教育及び関連分野に関する情報交換
	インド共和国	全国盲人協会グジャラート支部 National Association for the Blind, Gujarat Branch	2024.8.12 2024.8.12 ～2029.8.11	日本式手技療法教育移植事業、国際教育における生徒・教員の交流
附属聴覚特別支援学校	フランス共和国	国立パリ聾学校 The National Institute for the Deaf in Paris	2003.9.22 2021.9.30 ～2026.9.29	生徒間の学習活動の交流、聴覚障害教育および関連分野に関する情報交換

	大韓民国	国立ソウル聾学校 Seoul National School for the Deaf	2015.6.1 2023.6.1 ～2028.5.31	生徒間の学習活動の交流、聴覚障害教育および関連分野に関する情報交換
附属桐が丘特別支援学校	台湾	国立和美実験学校 National Hemei Experimental School	2016.11.25 2025.11.24 ～2030.11.23	児童生徒間の学習活動の交流、肢体不自由教育及び関連分野に関する情報交換
附属久里浜特別支援学校	中華人民共和国	浙江省寧波市達敏学校 Ningbo Damin School	2011.8.29 2023.7.3 ～2028.7.2	児童生徒間の学習活動の交流、自閉症児教育及び関連分野に関する情報交換
	中華人民共和国	江蘇省蘇州工業園區仁愛学校 Suzhou Industrial Park Ren'ai School	2014.9.28 2022.11.17 ～2027.11.16	自閉症児教育及び関連分野に関する情報交換

(2) 締結・更新の記録

年度	学校名	区分	相手校・機関
平成21 (2009)年度 以前	附属中学校	新規	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高等学校	新規	〃
	附属駒場中学校 附属駒場高等学校	新規	〃
	附属聴覚特別支援学校	新規	国立バリ聾学校（フランス共和国）
	附属大塚特別支援学校	新規	大邱大学校大邱保明学校（大韓民国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	三育再活学校（大韓民国）
平成22 (2010)年度	附属坂戸高等学校	新規	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
平成23 (2011)年度	附属中学校	更新	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高校	更新	〃
	附属駒場中学校 附属駒場高等学校	更新	〃
	附属久里浜特別支援学校	新規	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
平成24 (2012)年度	附属坂戸高等学校	新規	林業省附属林業教育センター（インドネシア共和国）
平成26 (2014)年度	附属桐が丘特別支援学校	更新	セロム学校（旧三育再活学校）（大韓民国）
	附属久里浜特別支援学校	新規	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校（中華人民共和国）
平成27 (2015)年度	附属駒場高等学校	新規	国立台中第一高級中学（台湾）
	附属坂戸高等学校	更新	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
	〃	新規	国立パダン第6高等学校（インドネシア共和国）
	附属聴覚特別支援学校	更新	国立バリ聾学校（フランス共和国）
	〃	新規	国立ソウル聾学校（大韓民国）
平成28 (2016)年度	附属小学校	新規	光州松源初等学校（大韓民国）
	附属坂戸高等学校	新規	フィリピン大学附属ルーラル高等学校（フィリピン共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	国立和美実験学校（台湾）
	〃	新規	国立南投特殊教育学校（台湾）
平成29 (2017)年度	附属坂戸高等学校	新規	カセサート大学附属高等学校（タイ王国）
	附属大塚特別支援学校	新規	チバガンティ特別支援学校（インドネシア共和国）

	附属桐が丘特別支援学校	更新	社会福祉法人 SRC 附属広州セロム学校 (旧セロム学校) (大韓民国)
平成30 (2018)年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立ソウル聾学校(大韓民国)
令和元 (2019)年度	附属視覚特別支援学校	新規	タイ視覚障害者支援クリスチャン財団及び財団管理下の盲学校、視覚障害関連教育・福祉施設 (タイ王国)
令和2 (2020)年度	附属駒場高等学校	更新	台中市立台中第一高級中学 (台湾)
令和3 (2021)年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立パリ聾学校 (フランス共和国)
令和4 (2022)年度	附属久里浜特別支援学校	更新	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校 (中華人民共和国)
	附属坂戸高等学校	更新	IPB 大学附属コルニタ高等学校 (インドネシア共和国)
	〃	更新	カセサート大学附属高等学校 (タイ王国)
令和5 (2023)年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立ソウル聾学校 (大韓民国)
	附属久里浜特別支援学校	更新	浙江省寧波市達敏学校 (中華人民共和国)
	附属坂戸高等学校	新規	インドネシア教育大学附属高等学校 (インドネシア共和国)
	〃	更新	環境林業省林業教育研修センター (インドネシア共和国)
令和6 (2024)年度	附属視覚特別支援学校	新規	全国盲人協会グジャラート支部 (インド共和国)
	〃	更新	タイ視覚障害者支援慈善財団 (タイ王国)
	附属坂戸高等学校	新規	クアラルンプール日本人学校 (マレーシア)
	〃	新規	バクアン大学 (インドネシア共和国)
令和7 (2025)年度	附属桐が丘特別支援学校	新規	国立和美実験学校 (台湾)
	附属駒場高等学校	新規	台中市立台中第一高級中等学校 (台湾)

(3) 報告書発行の記録

第1集 (2007 ～ 2008 年度)		2009 年2月発行
国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想に関わって～		
第2集 (2009 ～ 2010 年度)		2011 年7月発行
国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～		
第3集 (2011 年度)		2012 年3月発行
国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～		
第4集 (2012 年度)		2013 年3月発行
新たな国際教育の展開 ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～		
第5集 (2013 年度)		2014 年3月発行
附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材の育成を目指して～		
第6集 (2014 年度)		2015 年3月発行
附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材育成の充実を目指して～		
第7集 (2015 年度)		2016 年3月発行
附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～ダイバーシティ共生社会を創る人材育成の発展を目指して～		
第8集 (2016 年度)	附属学校群の国際教育の推進	2017 年3月発行
第9集 (2017 年度)	附属学校群の国際教育の推進	2018 年3月発行
第10集 (2018 年度)	附属学校群の国際教育の推進	2019 年3月発行
第11集 (2019 年度)	附属学校群の国際教育の推進	2020 年3月発行
第12集 (2020 年度)	附属学校群の国際教育の推進	2021 年3月発行
第13集 (2021 年度)	附属学校群の国際教育の推進	2022 年3月発行
第14集 (2022 年度)	附属学校群の国際教育の推進	2023 年3月発行
第15集 (2023 年度)	附属学校群の国際教育の推進	2024 年3月発行
第16集 (2024 年度)	附属学校群の国際教育の推進	2025 年4月発行
第17集 (2025 年度)	附属学校群の国際教育の推進	2026 年4月発行

(4) 令和7年度附属学校国際教育推進委員会名簿

委員長（教育長補佐）	篠塚明彦	
副委員長（教育局・特任助教）	田中裕子	
教育長	呑海沙織	
教育局次長	梶山正明	
教育局・講師	木村範子	
附属小学校校長	佐々木昭弘	
	黒木愛	附属小学校 教諭
	植野伸子	附属中学校 教諭
	物井真一	附属高等学校 教諭
	深宮美宇	附属駒場中・高等学校 教諭
	バゴット優子	附属坂戸高等学校 教諭
	鈴木隆将	附属視覚特別支援学校 教諭
	鎌田ルリ子	附属聴覚特別支援学校 主幹教諭
	菅野佳江	附属大塚特別支援学校 中学部主事
	小藺慶子	附属桐が丘特別支援学校 教諭
	石川千尋	附属久里浜特別支援学校 教諭